



アジア研究センター共同研究

「アジアの社会遺産と地域再生手法」レクチャーシリーズ

Vol.8

近現代モンゴル —ウランバートルにおける 定住と都市

八尾 廣

(東京工芸大学工学部建築学系建築コース教授)

INTRODUCTION

山家京子(神奈川大学建築学部建築学科教授)

山家 それでは神奈川大学アジア研究センター「アジアの社会遺産と地域再生手法」の公開講演会を始めたいと思います。私はこの共同研究の代表を務めております、神奈川大学建築学部の山家です。

本日は東京工芸大学工学部建築学系建築コース教授の八尾廣先生から、「近現代モンゴル：ウランバートルにおける定住と都市」についてご講演いただきます。

簡単に八尾先生のご紹介をさせていただきます。八尾先生は1966年大阪市生まれ、90年に東京大学工学部建築学科をご卒業され、92年に東京大学大学院建築学専攻修士課程を修了されています。原広司研究室に在籍され、私の大学院のときの後輩にあたります。大学院修了後、原広司先生のアトリエであるアトリエ・ファイ建築研究所に入所され、その後、ご自身の設計事務所を設立されています。2008年から東京工芸大学工学部建築学科の教員として教鞭を執られており、現在は日本建築学会と日本モンゴル学会に所属されています。八尾先生の大学の研究室は、建築計画研究室になるのですか。

八尾 建築設計計画 | 研究室になります。

山家 そうなのですね。後でご本人から正しくご説明いただいた方が良いかと思いますが、ご自身の設計活動も続けておられます。

事前に本日の資料を見せていただいたのですが、ものすごく密度の高いお話を聞けるのではないかと非常に楽しみにしています。それでは八尾先生、よろしくお願いします。

八尾 山家先生、ご紹介いただき、ありがとうございます。また、本日は公開講座にお招きいただき、ありがとうございます。今ご紹介にありましたように、私は原広司さんのアトリエを出た後、自分の設計事務所を設立し、建築の実践をしながら、東京工芸大学では主に建築設計と建築計画を教えています。大学に入ったからには本格的な研究をしたいとずっと思っていて、幸運なことにモンゴルと出会いまして、2013年から本格的に調査を始め、ちょうど10年続けてきました。今日はその研究の一環を紹介させていただきます。

LECTURER



八尾 廣

(東京工芸大学工学部建築学系建築コース教授)

1966年大阪市生まれ。1990年東京大学工学部建築学科卒業。1992年東京大学工学系研究科建築学専攻修士課程修了、アトリエ・ファイ建築研究所入所。1997年岸田建築設計事務所入所。1999年THTアーキテクト設立。2005年八尾廣建築計画事務所設立。2008年東京工芸大学工学部建築学科准教授。2017年NPO法人GER設立、副理事長。2018年東京工芸大学工学部建築学科教授。2022年東京工芸大学工学部工学科建築学教授。日本建築家協会登録建築家、日本建築学会・日本モンゴル学会会員。1999年小松市立宮本三郎美術館建設提案競技最優秀賞。2001年第7回石川景観大賞、第22回石川建築賞(県知事賞)、2016年グッドデザイン賞2016(15WINDOWS)、2020年グッドデザイン賞2020(長者丸の集合住宅)を受賞。

LECTURE

ウランバートルの調査を始めたきっかけ

それでは発表させていただきます。こちらはモンゴルの首都ウランバートルの写真[図1]になりますが、モンゴルというと、皆さん頭の中で想像されるのは大体こういう風景かなと思います[図2]。移動遊牧民がつくった、遊牧生活にとっては非常に完成度の高いゲルを住まいとして、家畜に寄り添いながら、年に2回から4回、宿営地を替えて、土地をできるだけ傷めずに草原の中で暮らすという生活が、今でもモンゴルで続いています。私自身も、モンゴルを訪れる度に草原には行きます。都市部から少し出るとこのような草原が広がっているので、遊牧民の方の住まいを調べさせてもらうこともあります[図3]。



【図1】ウランバートル空撮(北西部の丘より、2019年八尾撮影)



【図2】草原の遊牧民とゲルの住まい



【図3】

一方で、モンゴルの首都ウランバートルはどのような状況か、ご存じの方は少ないと思います。次にお見せする動画はドローンで撮影していますが、これが現在のウランバートルの姿です。奥に見えているビル群が中心部で、近年の経済発展で高層のオフィスビルや集合住宅が次々に建設されています。

私がウランバートルを研究することになったきっかけは、モンゴル人留学生のガンゾリグ(GANZORIG LUVSANJAMTS)君から見せられた1枚の写真でした。草原の中にぽつんとあるはずのゲルが、ウランバートルの丘の頂に向かって密集して建っている姿を見て、これは一体何が起きているのか理解できないというのが最初に感じた正直な感想でした。彼が卒業後モンゴルに帰国した年に、すぐにモンゴルに飛びまして、ゲル地区と呼ばれるウランバートルの周辺部の住

居地域において、彼の親戚が住んでいる住まいを調査したのが始まりです。最初はなぜこのような都市が出来上がったのか、全然分かっていなかったのです。でも何か見えない秩序というか、必ず理由があるに違いないと思って、主に現代モンゴルに関する書籍や論文を読みあさりました。ゲル地区は一見するとどこも同じに見えますが、場所により住民の入居年代や出身地が違い、地区ごとに雰囲気は異なります。2013年から調査を始め、2019年までに全56軒、全域にわたる地区ごとに1,2軒ずつ調査を行ってきました。

この研究をするにあたり、モンゴルのことを全く知らなかった中で、国立民族学博物館の館長も務めておられた、文化人類学分野では現代モンゴルに関して第一人者でおられる小長谷有紀先生こながや ゆきに、まずご相談に伺いました。小長谷先生より、「ゲル地区というのはある種スラムのような問題地区として捉える人も多いけれど、実はそうではなく、モンゴル固有の住まいの在り方のように私は思っている。地区ごとに住んでいる人の出身地や形成年代も違うし、雰囲気も異なるから、これまで社会学的にアンケートを取るような調査は行われてきたけど、あなたは住まいの専門家だから、一軒一軒丁寧に回ってみたら」というアドバイスを頂きました。

私は原研究室に在籍していたときに、ちょうど原さんが集落調査を再開されるという噂を聞いていて、同期の仲間と共に「インドネシアの集落調査に行きたいです」と手を挙げて、行かせていただいた経緯がありました。大学に再び戻り、集落調査のようなことをできないかと思っていたのですが、ウランバートルのゲル地区はまさに現代の集落といってもよく、いい研究対象が見つかったというところでした。一軒一軒、住居を回って実測調査を行い、ゲルや固定住居のバイシン内部での住まい方についても丁寧にヒアリングをしてきました。

モンゴル国の概況

背景となるモンゴル国の概況を説明します。モンゴルは遠いようで、実はとても近い国で、日本とモンゴルの国交は非常に良好です。東日本大震災の際にも、真っ先にモンゴル政府や国民が援助の手を差し伸べてくれた、極めて親日の国です。モンゴルは社会主義国としては非常に優秀な国でしたが、1990年に社会主義体制から市場経済体制に移行した際、旧ソ連からの援助が一斉に停止したときも、日本はいち早くモンゴル支援を表明し、市場経済化に向けた人材育成や制度整備、インフラ整備をずっと助力してきました。2022年には日本とモンゴルは国交樹立50周年を迎えています。

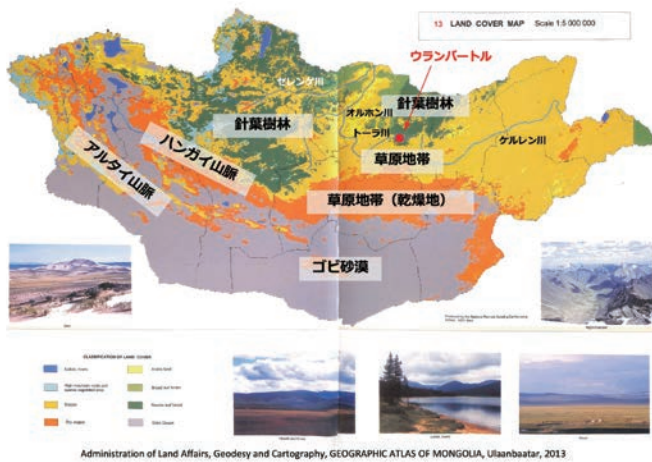
国土面積は日本の約4倍です。それに対して人口は340万人、大体茨城県と同程度です。そのうち、遊牧民は現在も30~40万人いるといわれています。人口密度にすると、1平方km当たり2人しかいないという、1人当たりの国土面積が極めて大きな国で、人口密度は日本の170分の1しかありません。ですから、手付かずの貴重な自然が多

く残る国です。現在、全人口に対して、半数近い48%が首都ウランバートルに集中しているという状況です。人種はモンゴル人で、主にモンゴル語を話します。宗教はチベット仏教が中心ですが、憲法で信教の自由が保障され、キリスト教の教会やイスラム教のモスクも建っています。あとは遊牧民の時代から続くシャーマニズムも残っています。政治は共和制で、大統領制と議院内閣制の併用です。

資源立国で、石炭、金、銅、レアアースなどを生産する鉱工業が主な産業です。主な輸出先である中国の景気に左右され、経済はかなり不安定ですが、全体的には平均年齢が30代という極めて若い国で、今後も経済発展は続くと思います。2022年現在、経済成長率は3.7%です。

モンゴル全体の地勢についていいますと、草原地帯が国土の7~8割を占めています[図4]。中央に大きく、かつてチンギス・ハーンが西洋世界まで攻め入った広大な草原地帯があります。しかし南の方は砂漠化しゴビ砂漠が広がり、北方には一部針葉樹林帯が広がります。首都ウランバートルは、針葉樹林帯と草原地帯の境目の辺りに位置しています。西側にはハンガイ山脈、アルタイ山脈があり、国土全体の平均標高は1,580mです。

大陸性の地盤で大地は安定しており、ほとんど地震はないのですが、気候に関しては、冬季は非常に寒く、平均でマイナス23度、ときにマイナス30度から40度になることもあります。それに対して、夏は極めて乾燥気候なのでとても爽やかですが、気温が40度まで上がることもあり、寒暖差が非常に大きな国です。



[図4] Administration of Land Affairs, Geodesy and Cartography, GEOGRAPHIC ATLAS OF MONGOLIA, Ulaanbaatar, 2013

ウランバートルの都市概況とゲル地区

Google Earthでウランバートルの様子を見てみます。ウランバートルは東西に延びる谷筋にあります。トール川とセルベ川という川の合流地点にあり、東西幅はおよそ20kmです。20kmというと、大体東京駅から武蔵境の辺り、あるいは東京駅の東側だと西船橋の辺りまでの距離ですから、東京と比べると非常に小さな都市であるといえます。中央の都心部に寄っていくと、街路が計画されているのが分

かります。社会主義時代に本格的な都市計画がなされ、当初は15万人の都市として計画されました。環状の道路が走っていて、これが何となくゲルのかたちを模しています。ここに2本の道路があり、中央に巨大なスパータル広場があります。ゲルの上から光が入って、下に光が差していく姿を模して、当時モンゴル人の都市計画家チメドがこの計画を立て、ソビエト連邦に承認されて実施に移されました。寄っていくと、基本的には街路や街区を囲うかたちで集合住宅や施設群がつくられて、中庭を持つタイプの都市計画がされているのが見えます。そこから北の方に移行していくと、私が10年以上調査をしてきた、ゲル地区と呼ばれる都市計画外のエリアになります。ちょっと寄っていくとそれぞれの住まいが見えてきますが、基本的には比較的広い敷地を木柵で囲い、その中にゲルや固定住居のバイシン※1を建てて住んでいます。ゲルは遊牧生活には最適な住居ですが、実は定住には向いていません。といいますのは、遊牧民は年に数回、宿営地を替えるときに、一度ゲルを解体して、ゲルを覆っているフェルトやテント生地を虫干しして清潔さを保ちます。私も実際に見て実感しているのですが、一度定住しゲルを建ててしまうと、それを年に2回も解体するなんてことは相当な労力です。解体している間にどこに住むのだという話もあるので、定住生活の場合は、あまりゲルは向いていないと思います。それから、冬の厳寒期の厳しさもあるので、人々はこつこつと蓄財をしては建材を購入し、ここに屋根が見えていますが、こういうふう固定の家、バイシンを建てて住んでいくという流れになります。ただ、ゲルは定住生活においてはいろいろなかたちで便利に使われているので、後ほどご説明しますが、おそらくウランバートルでは今後もずっと使われ続けるのではないかと私は思っています。

このゲル地区は、北方と西方の谷筋に広がっています。市場経済化以降拡大し、中心地から北方約20kmのあたりには夏の家地区※2と呼ばれる別荘地があるのですが、ついにそこまでゲル地区が広がってしまっています。

一方、中心市街地から南の方には近年開発された都市があり、例えば鉱物資源の利権を持っているような富裕層が住んでいます。ウランバートルは貧富の差も激しいのですが、ザイサン・トルゴイと呼ばれる展望台のある丘の南方には、インターナショナルスクールもあるような超富裕層のまちが、この10年間で建設が進められ、現在では新たな都市が形成されました。

それからウランバートル西方にも近年、副都心が出来つつあります。ウランバートルの南側の山を越えたところに新しい国際空港がようやく完成し、空港へ至る幹線道路が整備されたのですが、その道路沿いに市庁舎が移転し、中所得から高所得層向けの集合住宅群やショッピングセンターが建設され都市化していくという流れになっています。その向かいには対照的にゲル地区があります。ここは1960年代に、ウランバートルで100年に一度といわれる洪水災害が生じ、

住まいを失った人びとのために計画的につくられたゲル地区です。このゲル地区は整然としていますが、木板を並べ敷地を囲うかたちの住まいが並び、これが後のゲル地区のモデルになったのではないかとされています。

※1 モンゴル語で「建物」を意味する。一般的な住居や建物の呼称として用いられる。

※2 ウランバートルでは高所得層に限らず、北方にある自然豊かな夏の家地区に別宅を持ち、夏季はそこから通勤する人も多い。夏の家地区ではゲル地区とは対照的に、敷地を低く見通しの良いフェンスで囲う開放的な住まいが一般的である。

ウランバートルの歴史の変遷

現代のウランバートルが果たしてどういう経緯でこういう都市になったのかを理解するため、歴史を紐解いてみたいと思います。まずモンゴル国の非常にユニークな点は、1920年代からごく最近の1991年まで社会主義国だったわけですが、それ以前の17世紀から20世紀初頭にかけては清朝の支配下にありました。つまり、相当数の漢人が入植し住んでいました。ウランバートルの前身は、17世紀から19世紀にかけてはハルハの人々が崇拝したチベット仏教のジェブツンダンパ・ホトクトという活仏を中心とする移動寺院でした。僧侶の多くは基本的に遊牧の人なので、その寺院はウランバートル近辺の針葉樹林と草原の境目を28回も移動します¹⁾。都市の規模が大きくなり定着したところが、現在のウランバートルになります。ですから、元々は宗教都市でした。

社会主義時代は全ての土地は国有で移住も制限されていましたが、首都ウランバートルの労働力が不足し、地方から移住させ人口が増えてくると、アパート[図5]に住めない労働力を計画的に住ませたのがゲル地区の始まりです。いってみれば、余剰人口をゲルに住ませたのです。ゲルは2時間もあれば家族で建てることができ、冬のマイナス30度～40度でも、ストーブを焚けば生活が成り立つ、都市居住を補完する便利なツールとして使われたわけです。ゲル地区は社会主義時代に徐々に拡大を始めます。



[図5] Д.МАЙДАР МОНГОЛЫН АРХИТЕКТУР БАХОТ БАЙГУУДАДТ, 1972 : photo239

民主化と土地所有の法の制定

モンゴルはソビエト連邦の崩壊と連動し、1992年に資本主義へ

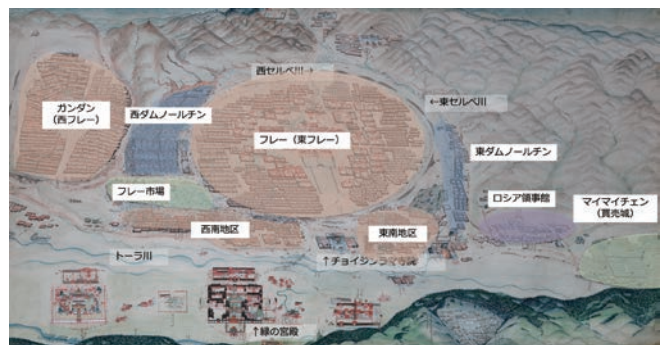
移行しますが、そのときに国民の移動の自由化も憲法で制定され、土地法が整備され、初めて土地の所有の概念が制度化されます。歴史的には草原の土地は誰のものでもなく、清朝支配下では封建領主の支配下だったので、土地所有の概念がありませんでした。社会主義時代は、土地は全て国有ですから私有の概念がなく、ようやく1992年の民主化以降に土地に関する法律、それから土地所有に関する法律が整備され、個人による土地私有が可能となりました。

2002年に制定された土地私有化法(モンゴル国民への土地所有化に関する法律)²⁾が、実はゲル地区を支えている背景にありました。この法律により、1世帯あたり0.07ヘクタール、つまり700平米もの土地を無償で所有できるという所有権が保証されました。2008年には改正され、国民1人あたり700平米になりました。700平米ということおよそ200坪ですから、日本で言えば高級住宅地の敷地にも相当する大きな面積です。この法律により、土地を不法占拠した人も一定期間住むと自分のものにできるという状況となってしまったのです。このゲル地区が通常のスラムと大きく違うところは、既にほぼ全ての世帯が土地を所有しているという点です。

当時なぜそのような法律ができたかという点、民主化以降、経済が低迷する中で、社会主義時代に順調に稼働していた工場や企業も、全て民間へ払い下げられてしまいました。そのような経済的混乱の中、世界銀行やアジア開発銀行より「土地を所有する制度をつかって、みんなに持たせましょう。そうすると不動産のやりとりが生じ、土地そのものの生産性が上がります」といわれ、その圧力で制定したわけ³⁾。しかし今、実際問題として不動産市場が育っているかというと、うまく育っていない。その辺りはまた後ほどご説明します。

20世紀前半のウランバートル市街地の様子

これは1913年に画家ジュグデルが描いた、ウランバートルの前身にあたるウルガの絵図です[図6]。事物のみならず人びとの活動の様子まで極めて詳細に描かれた絵図で、ウランバートルにあるボグドハーン宮殿博物館に掛けられているものを近年の共同研究(鳥取大学乾燥地研究センター重点研究:古写真を用いた環境問題研究)の中で高精細に撮影したものです。



[図6] ジュグデルによるウルガの地図(1913年) ボグドハーン宮殿博物館所蔵

中央にフレーという場所があります。「フレー」というのはモンゴル語で都市を意味しますが、他に都市を意味する言葉に「ホト」という言葉もあります。フレーはどちらかという政治をつかさどる円陣を指す言葉で、ホトは宿营地、遊牧で集まる場所を意味します。この円形の寺院街の部分はフレーと呼ばれています。西側にはガンダンというチベット仏教の大きな寺院を中心とする寺内町があり、このエリアだけは現存しています。フレーの両側には商業地区のダムノールチンという場所があり、中国商人が入り込んでいて、東側には買売城マイマイチェンと呼ばれる中国人街もありました⁴⁾。それからロシア人も入植しており、フレーの東側にロシア人街を形成していました。当時、ロシア以外にもイギリス、フランス、フィンランド、ノルウェーなど、さまざまな国々からの学術調査隊、学者、商人、探検家などがウランバートルを訪れて記録を残しています。

これがガンダン寺の当時の様子です[図7]。1927年に撮られたものですが、このガンダン寺周辺の寺内町は一見ゲル地区のように見えますが、古くから住んでいる人たちも多く、今も歴史的地区として残っています。1927年当時の寺内町には僧侶が住んでいましたが、これらの家を見ると、ゲル地区の住まいとほとんど変わらないことに気付かれます。柵で囲い、その中にゲルをつくり、一部柵に沿ってバイシン(固定住居)もつくるといふ住まい方には、おそらく古くからのルーツがあるように思っています。

当時の柵は今よりももう少し高く、大体2.5mくらいの丸太でつくられています。なぜこのような高い柵で囲うかについては、私もずっと考えているのですが、まだ解明できていません。この後お見せしますが、当時、中国人もウランバートルに住んでいたので、中国の四合院^{※3}の影響を受けたのかなとも思うのですが、古い寺院の絵図を見ても、必ず柵で囲われた敷地にゲルが建っている絵が描かれているので、より深いルーツと理由があるのではないかと考えています。

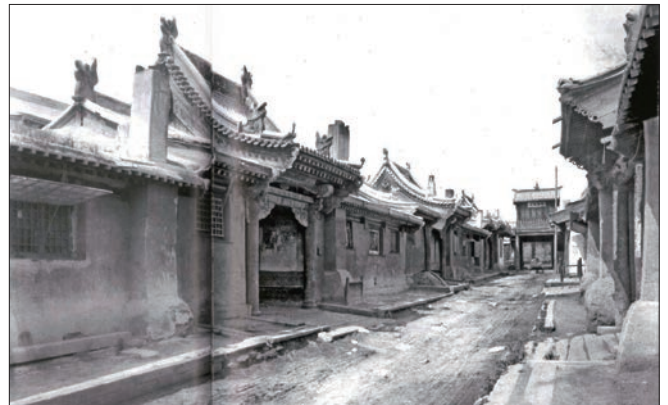
これはフレーの中央の寺院の様子です[図8]。こちらは買売城、中国人街の様子です[図9]。ご覧のように、壁は泥を塗って土壁にして、四合院の住居を建てています。



【図7】1927年 ウルガにおけるガンダン寺周辺の様子
オスロ大学自然史博物館 オスカー・マーメンコレクション UEMf09890_643



【図8】1927年 ウルガのフレーに立ち並ぶ壮麗な寺院建築群
オスロ大学自然史博物館 オスカー・マーメンコレクション UEMf09890_857



【図9】1913年 ウルガの買売城の街路 Ukhtomsky,D.E., Urga, 1913, HISTORY OF MONGOLS IN PHOTOGRAPHS VOL. VII: 45, No 4976-36

チンギス・ハーンの時代もそうだったのですが、モンゴルの人たちは異民族を支配していく中でも、異民族の文化を破壊しないのです。カラコルム^{※4}の博物館に、チンギス・ハーンが造営し、第2代オゴデイ・ハーンがモンゴル帝国の首都に定めたカラコルムの再現模型がありますが、中国人が住むまちは条坊制で四合院の住居が並ぶ中国人街のようにつくられているし、アラブ人街はアラブ的なキャラバンサライ^{※5}を中心とし、日干レンガ造の建物が並ぶまちを形成しています。一方、モンゴル人はその都市にずっといるわけではなく、広大な草原を面的に支配しているという図式で、季節に応じて都市内を移動しゲルに住んでいる様子が伺えます。おそらく他国の人たちがうまく利用して、その技術も取り込みながら支配し、その代わり彼らの文化を壊さないというのが、チンギス・ハーンの支配の仕方だったのではないかと思います。

これは商業地区のダムノールチンの写真で、左側に木材が積まれた巨大なタワーがあります[図10]。これは写真で測ってみると8mから10mにもなります。今、鳥取大学乾燥地研究センターの共同研究で、文化人類学や地理学、植物学など他分野の先生たちと古写真や絵図からウランバートルの歴史を読み解く共同研究をしていますが、なぜこのようなタワーがつけられたのかはまだ分かっていません。ただ当時、相当数の木材が都市建設や燃料として消費されていたことは見て取れます。草原の中で都市をつくる時に、やはり建築の材料が必要で、都市の近くに針葉樹林がないと調達できないから、

モンゴルの都市は大体森林と草原の境目辺りに立地したのではないかというのが私たちの見立てです。

別の写真では、チベット仏教の寺院の大きな壁面に、製材された角材が積まれた様子が見られます[図11]。ちょうどこの角材が、先ほどの木材タワーの材寸と似ているのではないかとということで、おそらく当時、こういうふうと同じ規格で製材され、ユニット化された角材を積み上げて壁をつくるという構法が用いられていたのだらうと推測しています。

これはロシア人街にあるロシア総領事館の写真です[図12]。



【図10】 Smelov, P.E., Urga, 1913, HISTORY OF MONGOLS IN PHOTOGRAPHS VOL. VII: 187, No 4976-84)



【図11】 Chuulun and Ivanov 2015: 178, No.1358-55, ロシア科学アカデミー・ビョートル大帝記念人類学民族学博物館 (クンストカメラ)コレクション



【図12】 Mamen, Oscar, Urga, 1914.5: オスロ大学自然史博物館 オスカー・マーメンコレクション UEMf09893_376

これらの写真は、当時この地に調査でやってきた学者や冒険者、商人たちが相当数の写真を残しており、大英博物館やノルウェー、アメリカの自然史博物館など、世界各国の博物館に所蔵されています。私たちは共同研究で、膨大なアーカイブから写真を読み込んで、当時の様子を立体的に浮かび上がらせる研究もしていますが、その研究は始まったばかりです。

※3 四辺に建物を配置し、中央を中庭とする中国伝統住宅の様式。

※4 ウランバートルから西へ230km、ウブスハンガイ県北西部のオルホン河畔に位置する都市。かつてのモンゴル帝国の首都でもあり、古都としても知られている。

※5 隊商(キャラバン)の商人や巡礼、旅人が宿泊できる施設。交易地の要地につくられ、市場に隣接して建てられた。

社会主義時代の都市計画

これは社会主義の都市計画の直前、1946年の地図で[図13]、ウランバートル市の都市マスタープラン局から入手したものです。この地図を見ると、先ほどの絵図で示したフレーの輪郭がまだ残っています。中央にフレーの広場があり、寺院群なども残っています。

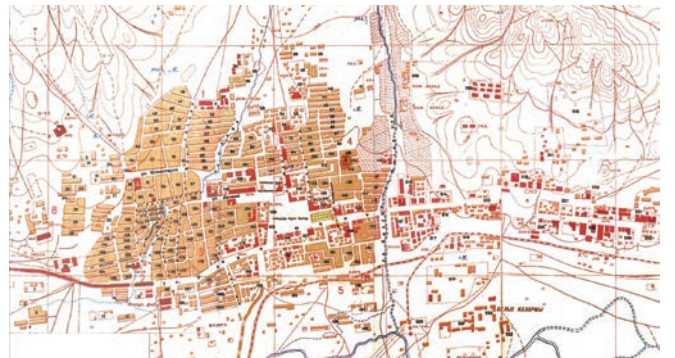
これは社会主義時代に入り、1953年に初めてマスタープランがつくられ、1954年に描かれた、モンゴル人建築家チメドが作成した都

市計画図です[図14]。先ほど説明したように、ゲルの天窓から光が南側に差していくイメージが基盤となっており、その軸となっているのは、チベット仏教のチョイジン・ラマ寺院(活仏8代ジェプツンダバ・ホトクトのボグド・ハーンの子のために建てられた寺院)が現存しているのですが、その軸線を延ばしていくというかたちでつくられています。でもこの図をよく見ると、先ほどお見せしたような、ウルガ時代の地図を下地に描かれているのが透けて見えます。ガンダン寺周辺だけは、かつてのまちの街路の様子が残されていますが、フレーの周りは社会主義時代の都市計画によって全て上書きされてしまったということが、この絵を見るとよく分かります。つまり、社会主義は都市とともに文化を破壊したわけです。スターリンは、チベット仏教の僧侶を1万7000人以上虐殺し、当時800あったとされる寺院の全てを破壊あるいは閉鎖したとされています⁵⁾。社会主義によって、都市も真っ白に塗り替えられてしまったということです。

これはごく最近の研究で得た情報ですが、2022年にモンゴル国立公文書館で入手した中心市街地の詳細な街路計画図です[図15]。よく見ると、軸線が微妙にずれたりしていますが、ほぼこの計画通りに現在の街路は出来上がっています。こうした図面があることが実は最近まで知られていなくて、モンゴル科学技術大学の先生も「図面なんてあるはずがない」と言われていました。図面を所蔵していたといわれる建築家協会の建物が紛争時に全焼し、そのときに失われたとモンゴル人の研究者も思っておられたのですが、新しい公文書館が完成した際に、その中に実は図面が残っており、しかも多くは原図の状態では保管されていることが分かりました。だから、そうした資料調査も、現地研究者の協力のもと鋭意進めているところです。

これが社会主義時代に塗り替えられたまちの姿です[図16]。一部は木造ですが、多くは真っ白な漆喰塗りのレンガ造の建物です。こうした社会主義国標準の新しいアパート群がつくられていきました[図17]。

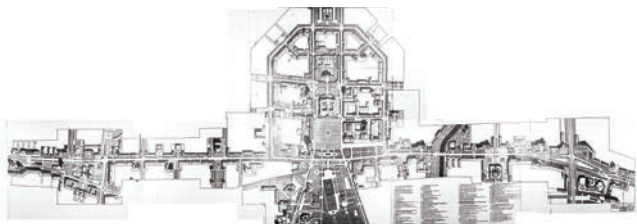
今、ウクライナ戦争の映像を見ると、ウクライナでも社会主義時代の遺産であるアパート群がロシア軍により次々と爆撃され破壊されています。モンゴルとかなり共通項があるので分かるのですが、ロシアは今回の戦争により、社会主義時代の遺産を自ら破壊する愚行を行っているのだと思っています。



【図13】 ウランバートル地図(1946年) ウランバートル市都市マスタープラン局より2013年入手



【図14】モンゴル人建築家チメドを含むプロジェクトチームにより計画された第1次都市マスタープラン (1954年) ウランバートル市都市計画局2015年提供



【図15】中心市街地の詳細な街路計画図(アーバンデザインプラン) モンゴル国立公文書館で2022年に入手



【図16】Д.МАЙДАР МОНГОЛЫН АРХИТЕКТУР БА ХОТ БАЙГУУДАДТ, 1972 : photo215, photo239



【図17】Д.МАЙДАР МОНГОЛЫН АРХИТЕКТУР БА ХОТ БАЙГУУДАДТ, 1972 : photo237

シベリア抑留された日本人と首都建設

次の映像も公文書館で入手したものです。ウランバートルの都市を建設する様子で、実は映っているのはみんな日本人です。シベリア抑留という言葉は皆さんご存じだと思いますが、第2次世界大戦の敗戦後、ソビエト連邦が満州にいた日本人約60万人を連行して強制労働させたというのが、シベリア抑留の問題です。2022年にシベリア抑留者の映画^{※6}が公開されましたが、ロシア各地でも本当にひどい状況で、極寒の中で食料もろくに与えられず、多くの人が亡くなりました。そのうち1万2,318人がモンゴルに連行され、工場や倉庫、建築、道路の建設現場に送られました。当時モンゴル政府が首都建設のために集めることのできたモンゴル人労働者は1,200名といわれているので、1946年から7年にわたり、およそ1万2,000人もの日本人抑留者がこの都市建設に投入されたというのは、首都建設におい

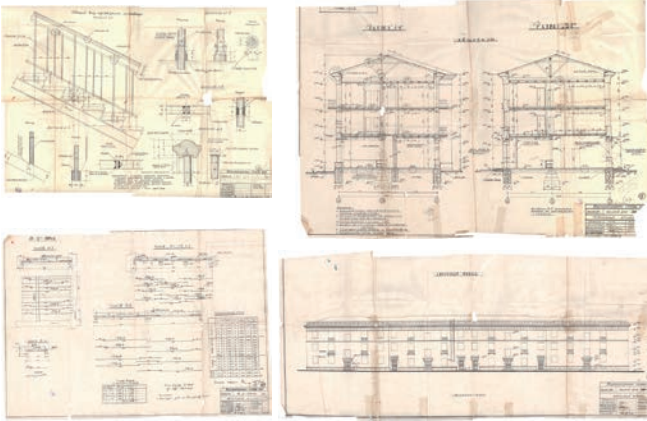
て相当なカンフル剤になったはず^{※6}。1940年代に都市建設がものすごい勢いで進んでいるのが、大英図書館の写真アーカイブから見ても分かるのです。なので、社会主義時代の都市建設に、実は日本人抑留者が相当な力になっていたということは、モンゴルの方々にも伝えたいし、日本人も知っておいた方がいいと思うのです。日本人抑留者のうち、1,618名の方は亡くなっています。ウランバートルの東側の丘の上には、大きく立派な日本人抑留者の慰霊碑が立っています。この映像を見て、私は胸が熱くなったのです。抑留された日本人が、これはまだ夏の風景だからいいですが、マイナス30度にもなるような冬でも軽装で、祖国へ帰りたいという思いで一生懸命働いているわけです。うまく言えないですが、日本人特有のものづくりに対して一生懸命取り組む勤勉さや真面目さと、その背景の彼らの思いを想像すると本当に胸を打たれます。

2022年にモンゴル国立公文書館で資料調査を行い、集合住宅の図面のスキャンデータを多く取得したのですが、1946年、47年に作成された原図に日本人名が記載されていて、それにもすごく驚きました。これらは日本人が清書をした図面です[図18]。トレーシングペーパーにインキングされた非常に精緻な原図ですが、右下の作成者欄に、8名の日本人名が見つかりました。これはロシア語でトレースと書かれていました。つまり、ソビエト連邦の設計者が鉛筆で描いた図面を保存用にインキングする仕事を、図面が描ける日本人が担っていたことの証拠になります。これは初めての発見です。室内労働をしていた日本人がいたという噂はあったのですが、実際に日本人の名前が発見されました。私も設計者として図面を引くので、一体どういう気持ちでこの図面を描いていたのだろうと想像すると、非常に胸が熱くなる思いです。日本人の描いた図面は、本当に丁寧に描かれています。日本に帰りたいという彼らの思いを想像し、本当に泣きたい気持ちになります。

その他にこうした古い写真記録から当時の建築構法もよく分かるのですが、レンガが建設資材として大量に使われていたのが分かります[図19]。記録を見ると、1930年にナライハ炭鉱での石炭生産が開始され、石炭を燃料として使えるようになったことで、レンガを大量生産できるようになり、建築資材が木材からレンガに置き換わっていったことが分かります。

これは社会主義時代のゲル地区の写真です[図20]。そして、これが今のウランバートルの姿です[図1]。歴史をたどっていくと、最初の宗教都市からずつつながって、モンゴルの遊牧の伝統もありながら、中国文化の影響、社会主義時代の都市の激変を経て、その後の市場経済化の後に、一見複雑な都市形成の経緯がようやく理解できると思います。

※6「ラーゲリより愛を込めて」は、シベリアの強制収容所(ラーゲリ)に抑留された実在の日本人捕虜・山本輔男が主人公の伝記映画。



【図18】1946年-47年に作成された集合住宅図面のトレーサーとして日本人抑留者8名の名前を発見
モンゴル国立公文書館にて2022年入手



【図19】モンゴル国立公文書館:K-2584 Хотын барилга 1930-50 он



【図20】N.TSULTEM, MONGOLIAN ARCHITECTURE, STATE PUBLISHING HOUSE, Ulaanbaatar, 1988: photo181

現在のウランバートル市街地の様子

次に、現在のウランバートル中心部の様子をご紹介します。これが中央のスフバートル広場で、奥に見えるのが国会議事堂です【図21】。この国会議事堂は、表面の広場側は増築されて新しくなっていますが、後ろ側は社会主義時代に建設された整然とした建物で、これも日本人抑留者が建設に参加しています。大変立派な広場で、休日になると多くの人でにぎわっています。夜景はこういう様子です【図22】。

広場に面して主だった建物があり、東側には国立オペラ劇場があります【図23】。元々はピンク色ではなかったようで、最近また白色に

塗り直されましたが、このオペラ劇場の建設にも日本人が関わっています。それから西側には市庁舎があります【図24】。

近年は中国や韓国の資本がどんどん入り込んできて、こうした高層のオフィスビルが次々と建ち上がっています【図25】。

これは社会主義時代にできた庶民的なノミンデパートです【図26】。デパートの前の広場や通りはこういう感じで【図27】、平均年齢の若い国なので、全体的に若い人が多い印象です【図28】。モンゴルの方々は概して皆さんおしゃれですね。感覚としては日本人とあまり変わらないです。私もモンゴルに行って全く違和感なく、すぐに溶け込むことができました。

市内には社会主義時代につくられた、レンガ造の比較的古い集合住宅がまだ相当数残っています【図29】。街路はととても広く計画されたので、街路側に1階部分が張り出して、そこが店舗になっています【図30】。



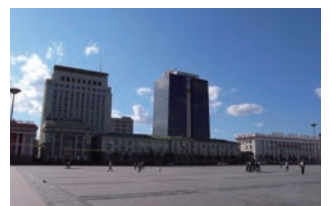
【図21】



【図22】



【図23】



【図24】



【図25】



【図26】



【図27】



【図28】



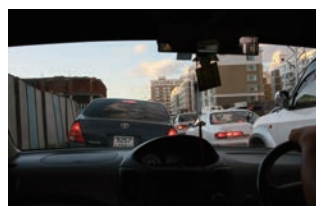
【図29】



【図30】



【図31】



【図32】

交通機関は、鉄道は都市を結ぶように東西に走っていますが、市内の主な移動手段は車、バス、タクシーになります[図31]。交通渋滞は年々ひどくなっています[図32]。

これは社会主義時代に建設された集合住宅の中庭です[図33]。広い中庭がありますが、市場経済化以降の開発でこれらの中庭にもビルが建ち始めており、環境の悪化が問題となっています。

これはモンゴル相撲が行われるドーム前の広場です[図34]。日本でいうと原宿のような、おしゃれな若い人たちが集まる雰囲気のある場所です。社会主義時代の建物も相当数残っています[図35]。

これは今、新空港連絡幹線道路沿いに建ち上がりつつある、新都心の建設現場です[図36]。新庁舎は今年建設が完了したようです。

市街地の外れにはカシミア工場などの工場群があります[図37]。カシミア工場も、実は最初、日本の戦後補償でつくられたものです。モンゴルのカシミアは素晴らしく品質が良いので、世界中に輸出しています。

建設の技術は、やはり精度があまり良くないです。というのも、モンゴルは10月から3月まで建設行為が禁止されているのです。あまりにも気温が低く、コンクリートが打設できず内装工事ぐらいしかできないので、専門の建築業者が育たないのです。ですから日本のように、身近に当たり前職人がいる世界ではないです。建設業者は大体、総合建設業的な何でも屋となってしまう、職人が育たない。そこがモンゴルの建築技術の発展の上では困難な部分であると思っています。

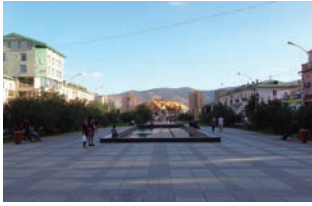
これは今も残るガンダン寺です[図38]。社会主義時代に破壊されなかった貴重なガンダン寺で、中に大きな大仏が祀られています[図39]。

これは南側の富裕層向けのまちをザイサンの丘の展望台から俯瞰したところですが[図40]。今は続々と高層マンションが建っています。一方で、北方の斜面に目をやると、こうしたゲル地区が広がっています[図41]。

草原の中には、ちょっと現代化した遊牧民がいます。パラボラアンテナを持っていて、インターネットにも接続する遊牧民の人たちです[図42]。でもゲルの中では昔と変わらない生活を送っています[図43]。



【図33】



【図34】



【図35】



【図36】



【図37】



【図38】



【図39】



【図40】



【図41】



【図42】



【図43】

現代モンゴルにおける住まいと環境の図式

これから、私が調べてきたゲル地区の話をしたと思います。

あまり単純化してはいけませんが、図式的に示すと【図44】、都市部には社会主義時代に形成された定住のアパート群があります。その系譜を継いで、今、民間のアパート群が建っています。こうしたアパートは当然インフラにも接続しています。冬は発電所で得た熱で湯を沸かして市内へ引き込み、そのお湯が各建物内のラジエーターを通り暖房となるわけですが、そうした暖房インフラにも接続しているエリアです。

それからゲル地区は一見スラムと言う人もいますが、歴史をたどってみると、やはりモンゴルではある種の当たり前の都市定住の姿と私は捉えています。ハシャーと呼ばれる木柵で囲い、その中にゲルあるいはバイシンを立てる、どことなく仮住まい的な感覚を持った定住の姿がゲル地区にはあり、それが草原と都市とのバッファゾーンにあるという図式が見えてきます。



[図44] 近現代モンゴルにおける定住の図式

近現代モンゴルにおける定住とは何か

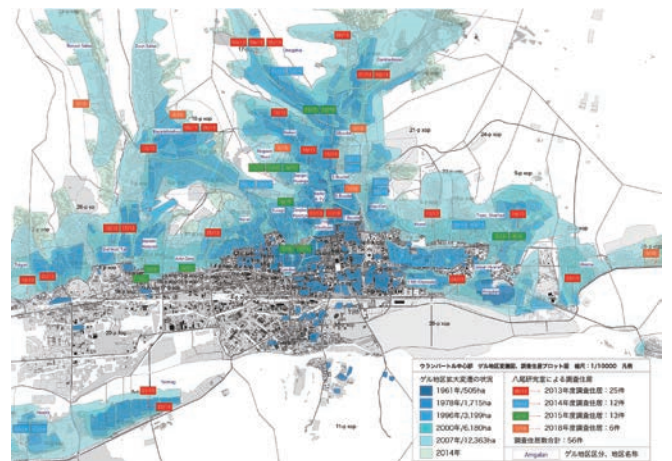
研究室では、2013年からゲル地区のほぼ全域にわたり、1地区につき1、2軒ずつ、計56軒の詳細な調査をしてきましたが、その後、社会主義時代に建設されたアパート内部ではモンゴルの人びとがどのように暮らしているのかが気になり、2019年よりアパートの調査を開始したところ。また、ゲル地区では7割以上の人々がセルフビルドで固定の家を建設しているので、一体どういう構法で建てているのかを、建設中の家を訪ねながら調べるといった構法の調査も行っています。

研究としては「近現代モンゴルにおける定住とは何か」という大きなテーマを掲げています。3,000年にわたり、遊牧生活が非常に根強く伝統的にあった国で、人びとが1カ所に定住すると、どういうことが起きているのか。モンゴル人にとっての定住は、われわれ日本人の定住とは明らかに感覚が違うところがあります。われわれは元々農耕民族ですから、土地を持ったらその土地を加工し、そこにしっかり根付いた家を建てる、そうしたらずっとそこに住むという感覚が定住です。しかし、モンゴルのゲル地区を見ていると、30年暮らしている人もいますが、われわれからすると、なお仮住まい的な感じがします。つまり、定住の概念そのものが日本とモンゴルでは異なる、その定住とは何だろうということが研究テーマになっています。そして、モンゴルにおける都市とは何かということも、さらに大きなテーマとなっています。

ゲル地区の住居調査

ゲル地区調査のプロット図です[図45]。濃いブルーから薄いブルーにかけての色はゲル地区の拡大の様子を示しています。このように一軒一軒回って実測調査と住民へのヒアリングを行っています[図46]。私は、モンゴル語はほとんどあいさつぐらいしか話せないのですが、通訳のできるモンゴル人留学生や市役所ゲル地区開発局のスタッフに通訳してもらいながら、内部での住まい方について、「お父さんはどこに寝ているの」といったことまで聞いています。

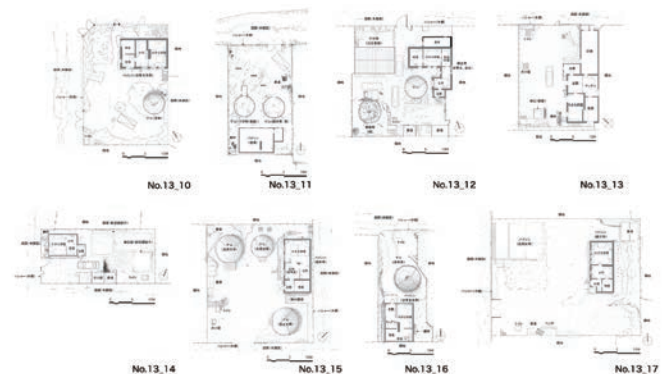
これが調査住居の実測図で[図47]、配置図にプランを落としたものです。すごくバリエーションに富んでいて、一つ一つ違うように見えるのですが、数多くの住まいを図面化するとある一定のパターンが見えてきます。調査の対象は、基本的にはウランバートル市役所のゲル地区開発局という部署に協力を依頼し、役所が協力してくれる住民をピックアップしてくれて調査しています。もう一つの方法は、外観から見て、住まいに対する意識が高そうだと分かるときがあり、そのような場合は飛び込みでお願いして調査をさせてもらっています。



[図45] 1961年以降のゲル地区拡大の様子・八尾研究室による2013-2018年度調査住居プロット図



[図46] ゲル地区におけるヒアリング調査の様子

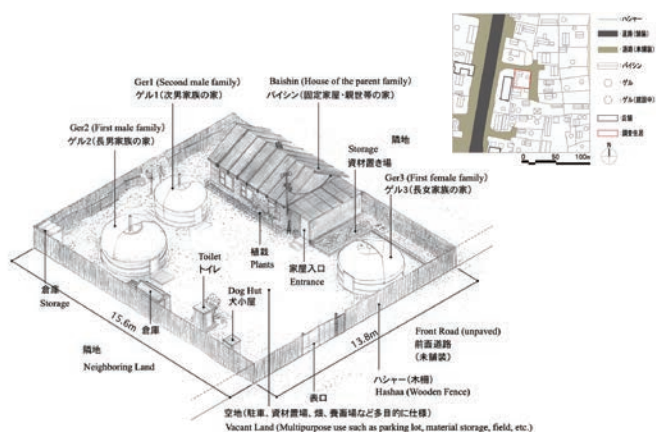


[図47] ウランバートル・ゲル地区調査住居 配置図・1階平面図 ー2013年9月 No.10-17 ー

ゲル地区の住居の構成

これは典型的なゲル地区の住まいの姿です[図48]。ハシャーと呼ばれる木柵で囲って、ゲルを建て、バイシン(固定の家屋)も建てます。ただ、住まい方はさまざまで、ここでは親世帯はバイシンに住んでいます。また、結婚して独立した長男、次男、それから長女の家族はゲルに住んでいます。しかし、モンゴルの人たちは多世帯居住をしないので、いずれ独立して出ていく前提です。最近Google Earthで見たら、この次男家族は既に独立したようで、そこに親世帯が増築していました。このように流動的に住まいの在り方を変えていくのにも、ゲルは便利に使われています。

それから上下水道がないので、トイレは外部にあります。家からできるだけ離れたところに3mぐらいの穴を掘って小さな小屋を建てて、トイレとしています。上水については、ゲル地区には500mから1kmごとに給水所があり、そこにタンクで水をくみに行っています。



[図48] ゲル地区内住居の典型例

ゲル地区の土地利用の状況

どの家も敷地をかなり広く持っています。私が調査した住居で平均すると、敷地面積は約500平米、建蔽率は12%程度しかありません。これだけ広い土地を持っているのだから、もっといろいろ使ったらいいのにと思いますが、使っていない人がかなりいて、土のままです。これは、各住居で敷地のうち家庭菜園や庭園として利用している部分に色を塗ったものです[図49]。黄色は温室を設けている部分です。多くの住居で土地利用があまりされていません。

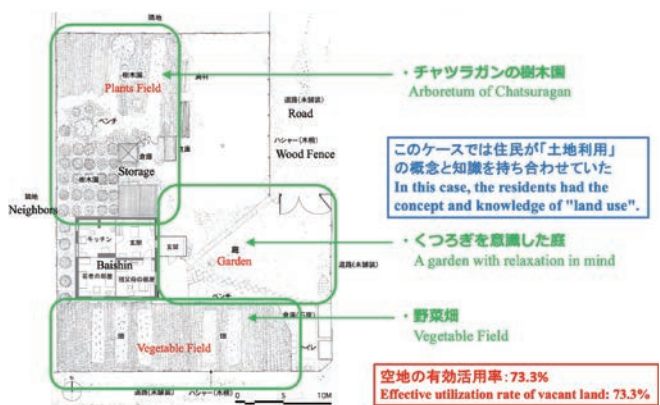
元々極めて乾燥気候なので、一度土を掘り返してしまうとなかなか草が生えてこないのを皆さん知っているのです。モンゴルの人たちにとっては大地が自然ですから、それを尊重するために、ゲルはあえて土を掘らずにそっと置いています。ですから遊牧民にとっては、ある意味、土を掘るのはタブーなのです。そのこともあって、あまり土地の加工をされないのが、こういうことになっています。

ただ、日本での生活経験がある人や、土木技師のような土を掘る技術を知っている方は例外です。これは社会主義時代に土木エンジニアだった高齢の方の家です[図50]。土地をフルに活用し、樹木を

植えたり菜園をつくったり、楽しみのための庭もつくっているのです。自宅にもコンクリートブロックを使い、食料備蓄用の地下室をつくっておられましたが、このケースのように知識や技術のある方は土地を加工しているわけですが、多くの人はそれをしていません。



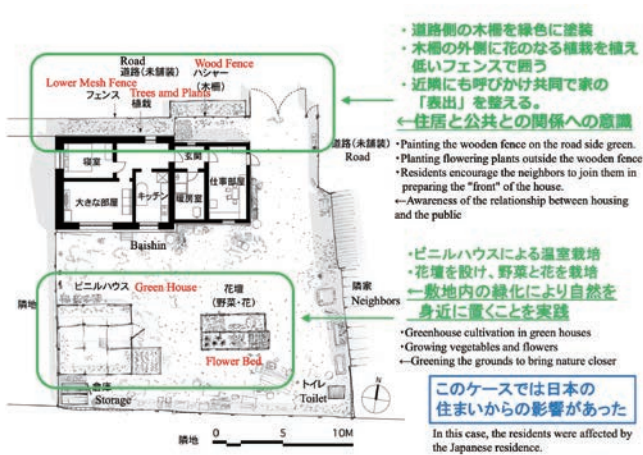
[図49] ウランバートル西側のHannin Material 地区、Ariin Denji地区で見られた敷地内の土地利用を行う住まい



[図50] 元土木技師と高校教師の老夫婦の住まい
土地利用の概念と知識を持ち、敷地を有効に利用する

こちらの事例は、静岡の御殿場に観光客向けのゲルに泊まれるキャンプ場がありますが、そこで働いていた方が日本の住宅地を見て、垣根など素晴らしいなと思い、モンゴルの自宅でもやろうということで、道路側の木柵を緑色に塗って花の絵を描いたり、草花を植えてベンチを置いたりして、公共に対する表出を整えている珍しい家でした[図51]。敷地内に野菜畑をつくったり、ビニールハウスをつくったりして、土地利用していました。ですから、元々土地を加工するという概念がないだけと思うので、そういうことを分かった人は実践しています。

これがその家の外観です[図52]。この家の奥さんが素晴らしくて、スケッチを描いて[図53]、近隣のお母さん方と一緒にやりませんかと呼び掛けて仲間を増やし、この通りだけ木柵が緑色に塗られています[図54]。これは敷地内の様子です[図55]。モンゴルの方は緑が好きで、ちょっとしたきっかけがあれば、皆さんこのように緑を植えて、水道がないにもかかわらず、大事に水をやって緑を育てる人もいるので[図56]、このゲル地区も何かをきっかけに今後変わっていくのではないかと思います。



【図51】日本での居住履歴を持つ家族の住まい
日本の低層住宅地を参考に、道路側の住まいの「表出」、敷地の緑化を行う



【図55】



【図56】

これだけの土地があるからこそ、ゲル地区がインフラにも接続せず、ここまで存続してこられたのだと思います。土地のポテンシャルといいますが、もっと密だったら多分衛生上などの問題は深刻になっていたと思います。ただ、今もやはり穴を掘って排せつしているので、土壤汚染は進んでいますし、多くの家の石炭ストーブからの煤煙により、冬期の大気汚染は非常に深刻な問題となっています。地方都市の小さな規模のゲル地区なら自然の浄化作用で問題とならないのですが、ウランバトルほど集積してしまうと都市問題になり、かなり深刻です。

定住における住居の補助ツールとしてのゲル

定住生活において、ゲルは生活を補完する非常に便利なツールとなっています。調査におけるヒアリングで、ゲルがいろいろな使われ方をしていることが分かりました【図57】。シャーマンの祈りの場、仕事場、家内制手工業の工場、子世帯の住まい、それから余裕のある人は、ゲルが好きだから夏のリビングとして利用するという方もいます。また、地方から出てきた人のための貸家として収入を得ている人もいます。ゲルは非常に合理的な建物で、2時間程度で建てることができるので、これからも便利なツールとして使われていくのではないかと思います。

これは工場として使われているゲルです【図58】。この方は地方で音楽教師をしていたのですが、ウランバトルに出てきて、観光客向けのキーホルダーなどの革製品を加工する技術を覚え、かなり収入を得ています。とても頭が良い方で、固定住居バイシンのつくりについてもよく考え工夫して、室内にトイレを設けている珍しい方でした。



【図52】



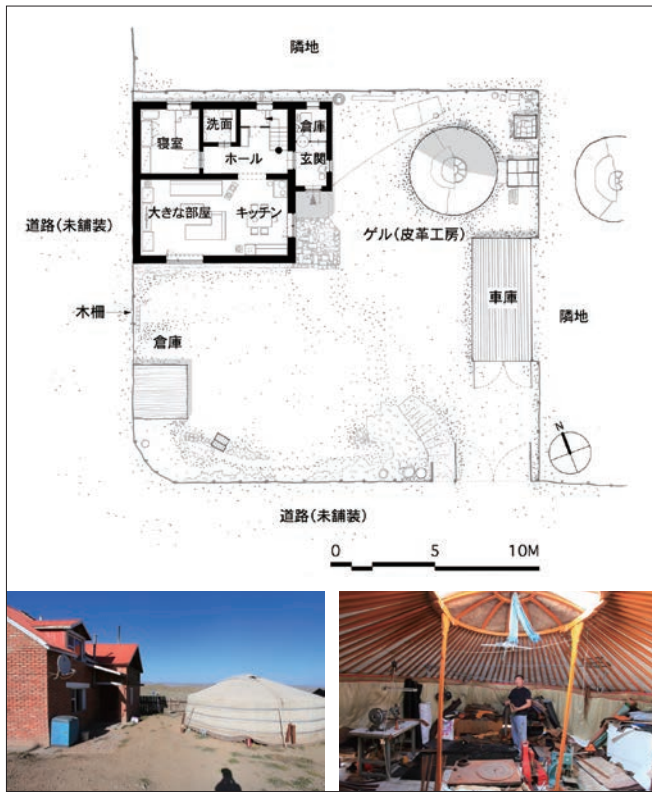
【図53】



【図54】



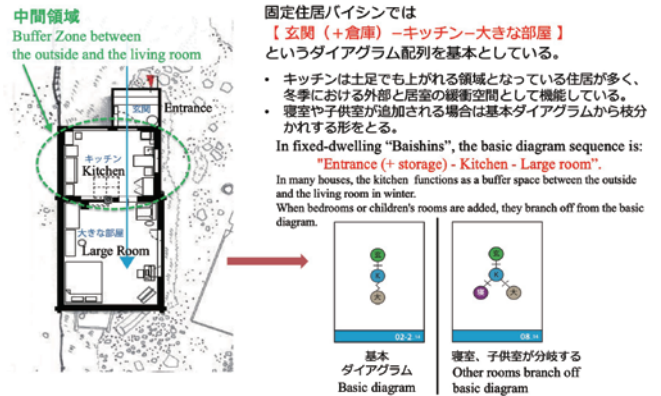
【図57】ゲル地区での定住生活においては、利用される伝統的な住居ゲルは住居の補助ツールとしてさまざまなかたちで使われている



【図58】家内制手工業(革製品の加工)の作業場としてゲルを用いている事例

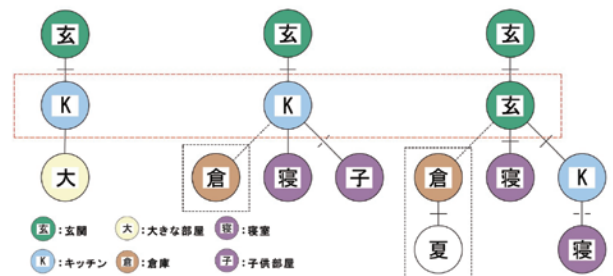
間取りのダイアグラム分析

次に、バイシン(固定の家)の間取りはどうなっているかを、実際にはかなりバリエーションがありますが、ダイアグラムを描いて比較しながら見ていきます【図59】。基本的な軸として、玄関、それからキッチン、大きな部屋という連なりが軸となっていることが分かってきました。モンゴルではリビングとは呼ばず、家族の使う大きめの部屋を「大きな部屋」、個室や寝室を「小さな部屋」と呼んでいます。大きな部屋はトムウロー(Tom öröö)、小さな部屋はジジグロー(jijig öröö)というのですが、<玄関-キッチン-大きな部屋>が多くのダイアグラムの軸として見えてきます。これはどういうことかという、冬の生活を見るとすぐに分かりました。玄関-キッチン-大きな部屋と連なりますが、玄関やキッチンがバッファゾーンになっています【図60】。間取りで説明すると、玄関とキッチンは土足で上がったもいいゾーンになっています。私たちがキッチンに入って靴を脱ごうとすると、「土足のままでいいよ」と多くの家で言われました。一番奥の大きな部屋は居住スペースとなっています。冬はかなり寒いので、皆さん大きな防寒靴を履くわけですが、トイレは外にあるので、相当頻繁に内外の出入りがあります。そうしたときに、靴脱ぎが結構面倒くさいのです。キッチンのゾーンはストーブも置かれ、煤で汚れるということもあり、土足でもいい靴脱ぎの場となる中間領域になっています。なおかつ、玄関から侵入してくる冷気がダイレクトに入ってくるゾーンなので、住まいの領域を一番奥にするということは、冬の生活を見るとすぐに分かる図式なのです。



【図59】ゲル地区の固定住居(バイシン)の平面ダイアグラム分析

50件中38件は、下全てキッチンや廊下、またはバイシン内の2つ目の玄関などの中間領域を軸に複数の部屋や主室へと接続している。(赤点線内)



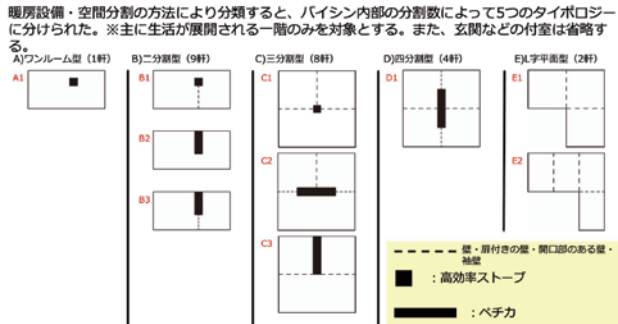
これは、風除室としての玄関だけでは冷気が主室である大きな部屋や寝室に侵入してしまう為、その対策として玄関に隣接して中間領域を設けていると推測できる。また、24件中17件がこの中間領域に当たる部屋で靴を脱いでおり、ストーブを配置している割合も高いことから、中間領域までが汚れが許容される領域として認識されているのではないかと。

【図60】ダイアグラムにみられる「中間領域」

バイシンにおける居室の空間分割の類型

室内に置かれている暖房器具が、単体の高性能のストーブの場合もあれば、ロシアから入ってきたペチカで、レンガ造の壁を積み上げて、その中に煙道を通して放熱壁をつくって暖房する方式と、両方ありますが、大体その暖房器具が基点となって領域分割がなされる傾向も読み取れました【図61】。

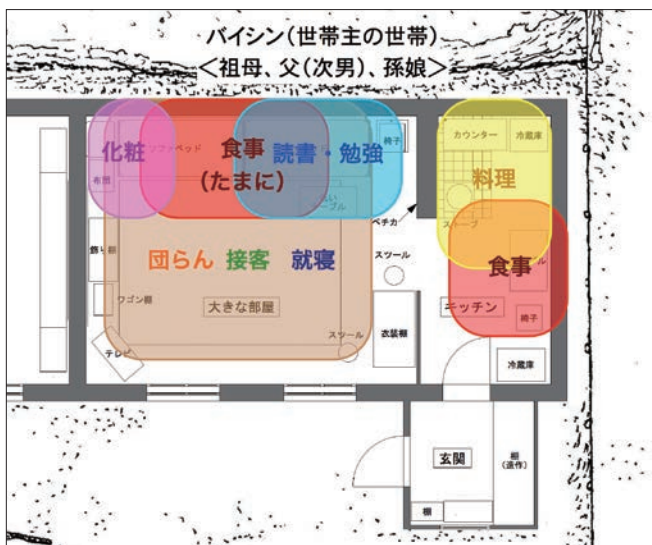
どちらかという低所得者の人が多くて、こつこつ蓄財して自力で建てているので、バイシンは概して規模が小さく、大きな部屋の1室しかない場合も多いのですが、この部屋でどうやって暮らしているのかと住まい方に関するヒアリングも行ったところ、このように生活場面が重複していることも分かりました【図62】。ただ、調理と食事の場所は他の生活場面とは分かれています。ここに暖房の壁、ペチカがあって、奥のトムウロー(大きな部屋)ではあらゆる生活場面が展開します。なお、この重複する生活場面を展開するのに彼らはどうやっているのかということ、小さくて低いスツールや机を使うのです。スツールや小さなテーブルを移動し場面転換して、生活場面を変えていることも分かってきました。



※ストーブの種類は、間取りに大きく影響する。
 ・ペチカ（放熱壁）は空間の仕切りとしても用いられている。
 ・高効率石炭ストーブを用いた場合は部屋を一体としてワンルーム的に住む傾向がある。
 ・低圧石炭ストーブによる温水循環型の各室暖房を用いると比較的自由度の高い間取り（上記 E）にする事が可能となる。

【図61】固定住居バイシンにおける居室の空間分割の類型

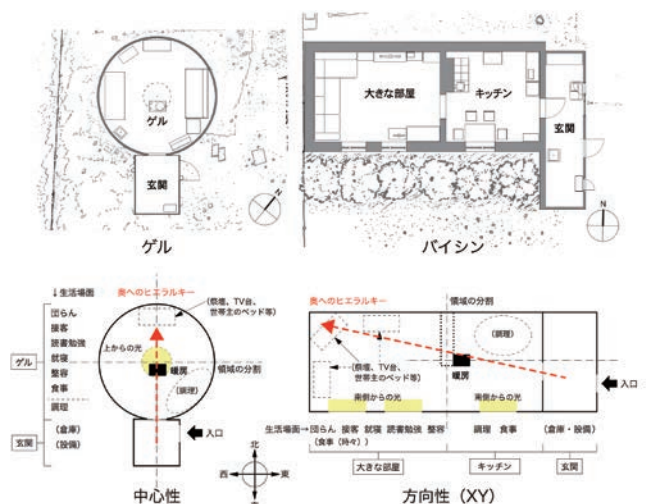
として空間分割がなされ、右手に調理の場所があり、左手から座る場所を兼ねた低い寝台が並び、一番奥がヒエラルキーの一番高い場所で、主人の席や仏壇が置かれています。バイシンの場合は南側に開口部があって、天井は低く抑えています、多くは入り口が東南側にあり、入ると右手に調理の場があり、入り口から対角線上の奥にテレビや仏壇が置かれていて、ゲルと同様の感覚でつくられていることが分かるのです。建設の過程はゲルとは全く異なりますが、多くの住民へのヒアリングから、ゲルと同じような感覚で固定の家をつくられているのが分かるので、やはり長い遊牧の伝統に根ざすゲルから来る住まいへの意識が受け継がれているのを感じます。



【図62】生活場面の展開と重複の様子

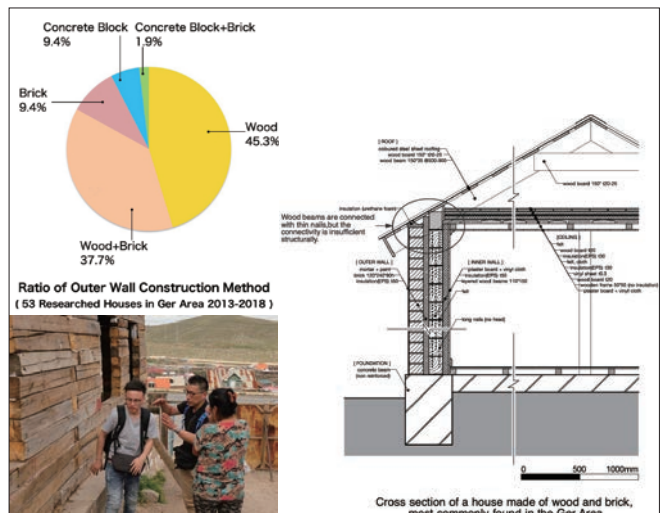
セルフビルドによるバイシンの構法

最近調べているゲル地区のセルフビルドのバイシンにおける構法の研究です[図64]。モンゴル人留学生のバースカ(BAASANSUREN MAGSARJAV)君から大工さんにもいろいろヒアリングしてもらって、ゲル地区のバイシンがどういう構法で建てられているのかを、何パターンか抽出しています。どういう作り方が一般的かというと、左側に写真がありますが、角丸太を約30cmの頭なしの釘で打ち付け、互いに緊結しながら積み上げていきます。それで基本の壁をつくり、小屋梁を渡して屋根をかけ、最初は木造でつくります。内側に断熱をしていますが、天井はフェルトを何枚も天井裏に重ね、その上に板を敷いて天井裏の部屋をつくり、そこを物置にしています。でもそれだけだと断熱性能が不足するので、その後蓄財して、元々の外壁の外側にレンガ壁を立ち上げます。その際に隙間を空けておいて、そこにグラスウールを詰め込み、断熱と構造を強化するのが、最も典型的なゲル地区の住まいです。基礎は無筋ですが、土を掘りベニヤで型枠を組んで厚さ30cmから40cmの基礎を現場練りコンクリートで打設しています。



【図63】ゲルとバイシンの平面図と図式・対応する生活場面の配置

小長谷先生は「丸いゲルを四角く住む」とおっしゃっていましたが、バイシンとゲルは室内の図式が非常に似ているのです[図63]。ゲルは寒いから、やはり風除室としての下屋を設けたりもするわけですが、風除室となる玄関に入って、中央に光が落ちてきて、そこを中心



【図64】セルフビルド住宅の典型的な矩計図
 木造で建設した後に、外壁の外側に断熱材をはさみ、レンガ壁を立てて構造・断熱を強化する

ゲル地区における定住の姿

ゲル地区における定住の住まいについて近年見られる傾向は、余裕ある敷地を利用する住民が少しずつ増えているということです。最近Facebookを見ますと、盛んに「うちはこんな庭をつくったぜ」といった自慢話を投稿している「庭づくりの方法」というページがあり、盛んに情報交換が行われています。定住生活も長くなってきて、徐々に土地を利用する人が増えていけば、ある臨界点を越えると、庭づくりをやる人が一気に増えるのではないかと思います。ただ、これには実は技術が要ります。まず極端な乾燥気候なので、日本のように勝手に雑草は生えてこないし、樹木も育ちにくい環境です。また雑草にもいろいろと種類があるらしく、手入れが必要で、樹木についてもただ植えただけでは枯れてしまうので、植樹の際、少し地面を掘り込んで保水性を高めるなど、植物を育てる上での知識が必要となります。Facebookの庭づくりのページを運営している方が植物の専門家で、その方がいろいろな知識も紹介しているので、徐々に広まっていくようです。今後、土地を緑化したり自宅で野菜づくりをしたりする人は増えていくのではないかと私は予想しています。

それからコミュニティ意識は、われわれと全く感覚が違います。いろいろな地方から都市部に集まってきて、2m以上の高い柵を立てて、どちらかという通りに対して閉鎖的に家をつくります。隣近所との関係を一軒一軒聞いていると、大体あいさつ程度です。それほど仲良くなっていない。まして隣近所で一緒に何かやろうということはありません。それぞれの住区ごとに地区長(日本で言えば自治会長)がいて、電気代を集めたりしていますが、たまたまその地区長がすごく人を束ねる力のある場合は、住民がみんなでフェンスを緑に塗るといったことも起こり得ますが、多くは比較的希薄というか、そもそもコミュニティの意識や住まいの外への関心があまりありません。ただ、これも徐々に変わっていくのではないかなと思うのです。それに気付かされたのは、アジア開発銀行が援助して、フェンスを見通しのいい鉄柵にし、道路改善を施した地区を見に行った際に、住民に「これ住みにくくないの」と聞いたら「いや、中が見えるようになって初めて気付いたけど、道路から見られることによって、逆に敷地をきれいにするようになったよ」と言ったり、「こういう植物を置いて、レモンの木を植えたので、すごくきれいだろう」と自慢気に話をするなど、道路を意識した回答が多く聞かれました。つまり、これまであまり柵の外に対して意識してこなかっただけで、一度知ると皆さん気付かれるということも分かりました。現代のゲル地区では定住の文化が移行期にあって、定住生活が長く続くことにより少しずつ住民の気付きが増えてきたときに、ゲル地区はもっと住みやすい地区として生まれ変わるのではないかと想像しています。

それから、まだうまく言葉になっていないのですが、ゲル地区にはどこか仮住まい的な感覚が明らかにあると思います。定住といっても、

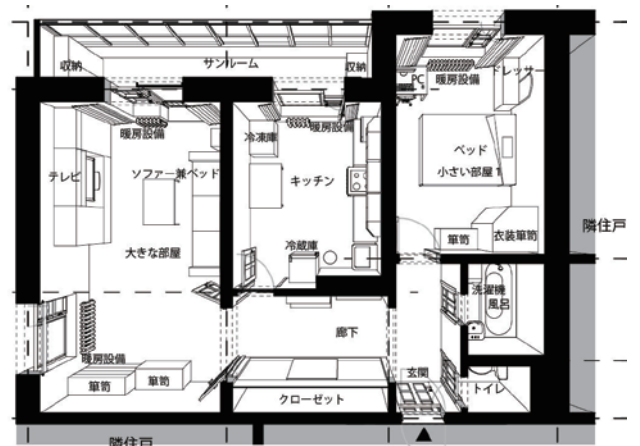
われわれの定住と同じ感覚ではないかと。先ほども申し上げましたように、彼らにとっては当たり前ずっと長く住んでいるけれど、土地に対する愛着というものでもないのですが、私たちから見るとどれだけ長く住んでいる人でも一時的に住んでいる感じがするのです。

また、ゲルは今では完全に住居補完の便利なツールとして使われています。もちろん伝統的な住まいという意識もあるし、大体皆さんゲルは好きですが、便利なツールと化しています。だから現代の定住生活にも適応させ、今後もずっと使われていこうと思います。そして、ゲル地区にあえて住む人は、自然としての大地の近くに住みたいとおっしゃる方が多いので、モンゴルの方々の自ら工夫し住まう力により、今後も存続していくのではないかと考えています。

社会主義時代のアパートの調査

次に、近年研究を始めたアパートという形式の定住の住まいの話に入りたいと思います。2019年に一度調査に行き、15軒回りましたが、その後2020年、21年はコロナの影響で調査ができず、2022年もうきなり人の家にずかずか入る調査は遠慮した方が良くと思い、資料調査に集中したので、まだ初期段階になりますが、研究の一端をご紹介します。

社会主義時代のアパートメントも、調べ出すと非常に面白いです。やはり年代ごとにデザインや構法の変遷があるということと、公文書館で図面が発見されたこともあり、平面図を見ると、間取りが明らかにモンゴルのではないのです[図65]。ゲル地区をたくさん見てきて分かったことは、モンゴルの人たちは、家族共有の場所はできるだけつなげて使います。その中の領域分割では、床の張り替えをしたり、ちょっとした小壁を出したり、壁があっても扉を設けないとか、そういう感覚が多いのですが。ソビエト連邦の設計者が設計した間取りは、完全に独立した部屋同士を扉で仕切る、それらを廊下でつなぐというプランなので、おそらくモンゴルの方々は、それを変えて住んでいだろうと想像したのです。それを確かめたくて、一軒一軒、調査を始めています。

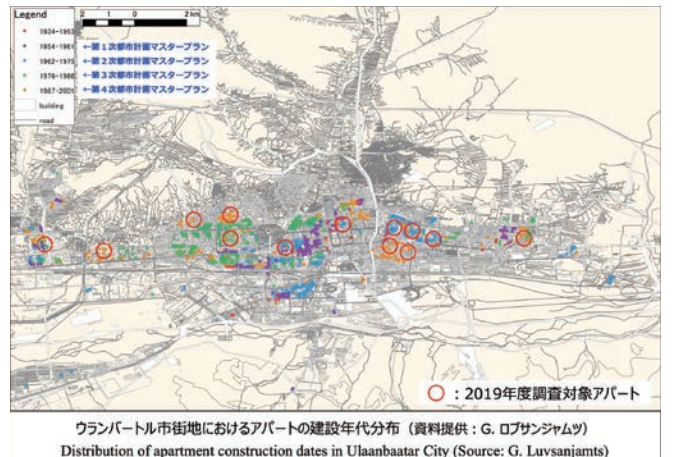


【図65】2019年：社会主義時代のアパート実測調査より作成した見下ろしベース

住居の調査はゲル地区と同様に、実測調査を行い、生活場面についてもヒアリングしています。その一方で、公文書館にはお宝のような設計図の原図が膨大に残されていることが分かったので、鋭意資料調査も行っています。

これが社会主義時代のアパート群の姿です[図66]。中はこういう様子です[図67]。やはり集合住宅でのプライバシーの感覚は、ゲル地区とは比べものにならないくらい皆さん高いので、基本的に知り合いの家しか調べられなくて、前述のバースカ君に友達、友達の友達、親戚、親戚の友達に声を掛けてもらい、ようやく15軒、中に入らせてもらい調査できました。ですから、こちらでは調査対象を選べない状況でした。

モンゴルの研究をするきっかけを与えてくれた前述のガンゾリグ君は、その後政府給費留学生で東京大学都市工学専攻大学院博士課程に再留学し、今では博士号も取得していますが、この図は彼が不動産関係者にヒアリングして作成した、ウランバートル市街地に残っている社会主義時代のアパートの分布図です[図68]。各マスタープランの年代ごとに色を分けています。中心部から建設が始められ、その後市の東西に順次建設が進められた様子が分かります。



[図68]

社会主義時代のアパートの外観・建築構法の変遷

これはまだサンプルが少ないですが、2019年に調査対象となった15軒のアパートメントを整理した表です[図69]。それぞれのマスタープランの時代ごとに分けています。

構法的には、初期はレンガ造になります。1970年代にはPC造^{※7}が用いられるようになります。やはりレンガは効率が悪いということと、燃料を大量に消費するので、ソビエト連邦よりPC造の技術が導入されたのだと思います。PC造は工場生産し、現場ではそれを組み立てるだけなので、確かに非常に効率が高く、また冬季も建設が可能なので、それ以降は全てPC造で建設されました。PC造でも、初期の頃は洗い出し仕上げ^{※8}が用いられ、なかなか雰囲気が良いです。これは設計者としての想像ですが、当時の技術者が、PC素地だと無機質なので工夫しようとしたのではないかと思います。1970年代のPC造初期の洗い出し仕上げのアパートは、今では汚れがうまく沈着して歴史が感じられ、とても雰囲気が良いです。これらはレンガ造のアパートと合わせて社会主義時代の建造物として保存し、今後も使われてゆくと良いのではないかと思います。

ただ、その後のPC造は塗装やタイル仕上げに切り替わり、合理化されていきます。この新しい年代のアパート群は、塗装が剥げたり、タイルが剥落あるいはヒビが入ったりするなど、やはり良い古び方をしていなくて、徐々に撤去される運命にあるかもしれないと思っています。

ちなみに、ゲル地区の住居改善に寄与する目的を持つ都市計画家や建築専門家^{※9}で立ち上げ、私も参画したNPO法人GERで、国立女子大学の松本年史先生(建築構造学)が国土交通省の補助金を取得され、ウランバートルのPC造アパートの耐震性について調査をされたのですが、構造的にはPCの状態は良好で、モンゴルは地震の頻度が極めて少ないということもあり、耐震性は今でも大丈夫でした。ただ、環境的にはシール材が劣化しており、目地部分から冷気が侵入するので、そこは問題ですが、断熱性能が高く耐久性のよいシールで



[図66] Д.МАЙДАР МОНГОЛЫН АРХИТЕКТУР БА ХОТ БАЙГУУЛАДТ, 1972 : photo239



[図67]

打ち替えれば、まだまだ使えると思います。

公文書館で入手した図面を見ると、これらのアパートのPCは非常によく計画されており、溝が設けられ設備配管のルートも全て組み込まれています。おそらくソビエト連邦で時間をかけ完成された技術を輸入したのだと思います。

これは初期のレンガ造の建物です[図70]。元々白かったと思うのですが、その後の改修で化粧直しされて、黄色く塗られています。その次もレンガ造で、右下はPCの洗い出しです[図71]。レンガ造の集合住宅もなかなかかっこよくて味があります。それ以降はタイル張りや塗装になり、意匠的には単調となっていきます。

公文書館で調べても、この後のPC造の図面はほぼ1つのパターンの繰り返しで、図面も全部A3判で、ほとんどコピーです。その中で2〜3のパターンからチョイスできるようになっていて、プロジェクトごとに選ぶという感じです。住居の構成員は、社会主義時代は職場ごとに1つのアパートに住んでいたことが、2022年に調査した際、公文書館所蔵のリストから分かりました。それぞれ、「〇〇工場の〇〇労働者のためのアパート」というふうに名付けられています。ですから、構成員の家族構成が分かったら、それに応じて、間取りはこのAタイプ、Bタイプ、Cタイプの組み合わせでいこうと決めて、新たに設計図は描かずにすぐ建設ができるという合理化がされていたのだと思います。

間取りもきちんと実測調査をして、住まいの様子をどう表現したらいいか考えたのですが、結果的に家具を入れた見下げパースを作成して分析しようとしています[図72]。肝心の間取りをどう変えているかについては、調査した住居に該当する設計図書が見つかった場合は、それと比較すればどこを変えているかが分かります[図73]。例えば扉はよく取り払われている事例が見られます。彼らが小さい部屋と呼んでいる個室、子ども部屋、寝室だけは扉が付けられていますが、その他のゾーンに当たる廊下やホール、キッチン、トムウロー(大きな部屋)など家族共用のスペースは、できるだけ扉を取っ払ったり、大きく開口部を広げて使っていたりするケースが多々見られました[図74]。これはやはり予想した通りでした。

中にはキッチンの位置を強引に変えている方もいました[図75]が、これも非常によく分かります。大きな部屋は、ゲル地区やゲルでは、そこに食事の場もあるわけですから、アパートでキッチンが離れている場合、非常に違和感を感じるだろうというのはあって、キッチンを移設した方の気持ちは非常によく分かります。

あとはベランダを室内化しているケースもよく見られました。部屋の使われ方は、事例が15軒しかないのですが、まだ研究はこれからです。

※7 プレストレストコンクリートの略称。規格化された壁などを構成するコンクリート部材を事前に工場生産し、現地で鉄骨の骨組みにはめ込んで組み立てる工法に用いられる。

※8 コンクリート打設後、完全に硬化する前に表面を洗い流し、砂や砂利などの骨材を露出させる仕上げの手法。



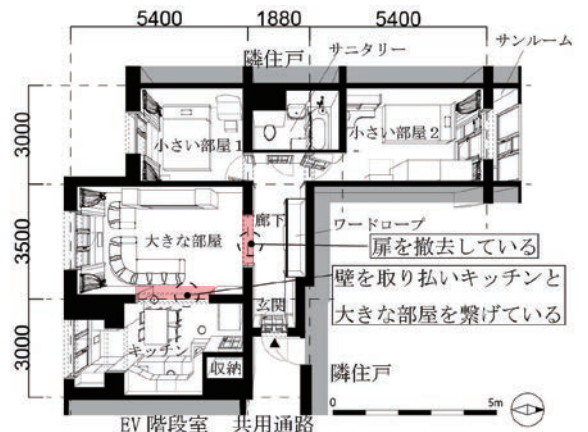
【図69】社会主義時代のアパート：2019年度調査住居の外観・建築構法の変遷



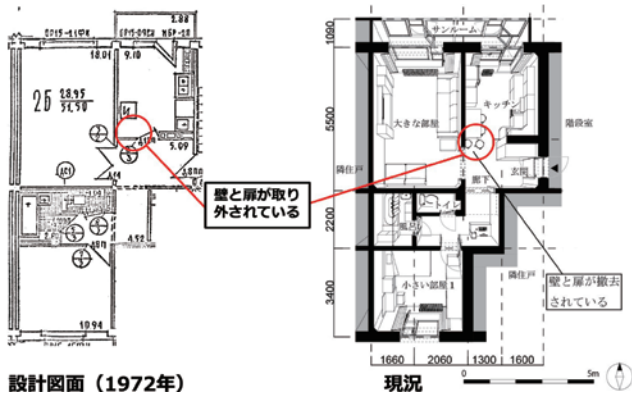
【図70】



【図71】



【図72】アパートの改変事例：壁を大胆に取り払ったケース



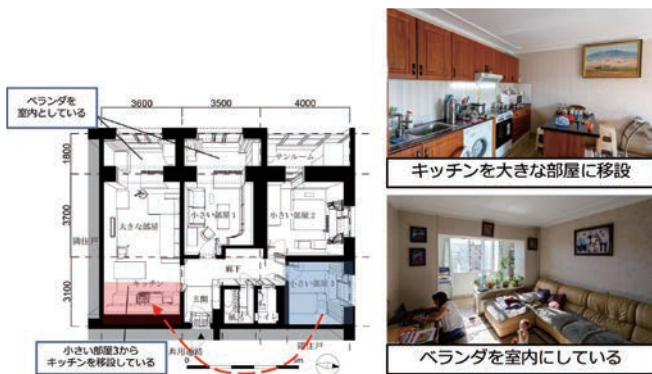
[図73] アパートの改変事例: 壁と扉を取り払ったケース

めたいと思っています。

社会主義国家における都市建設というテーマに結び付ければ、ソビエト連邦やウクライナ、他の諸国との共通項がおそらくかなりあります。元々ソビエト連邦が輸出したわけですから。その辺りの全貌を、まずはモンゴルから確かめていきたいのですが、ロシアでは当面は調査できないので、せめてモンゴルだけはしっかり解明していきたいと、決意を新たにしているところです。



[図74]



[図75] アパートの改変事例: キッチンを大きな部屋内へ移動したケース

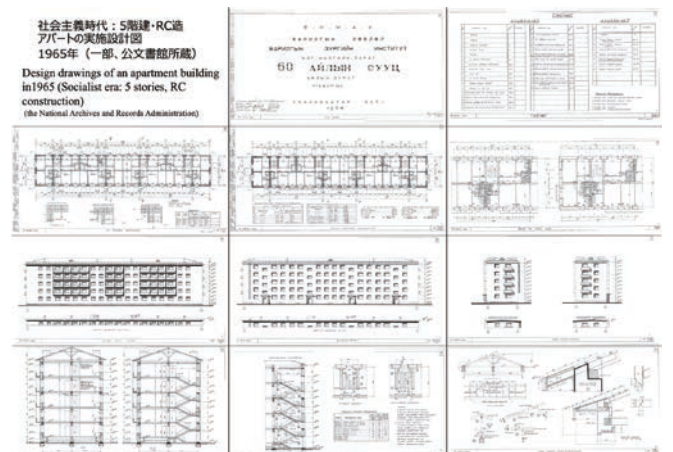
国立公文書館での実施設計図書の資料調査

国立公文書館[図76]での図面の調査も、まだ始めたばかりですが、これはかなりわくわくする調査で、原図がかなり良い状態で残っています[図77]。トレーシングペーパーにインキングした図面が残っていて、しかもモンゴルの研究者もまだ手つかずの状態ですから、私が初めて掘り出しているのだという気持ちで調査しています。ただ、ポーランドからの研究者も来ていたので、私も含む各国の研究者により今後調査が進むと思います。

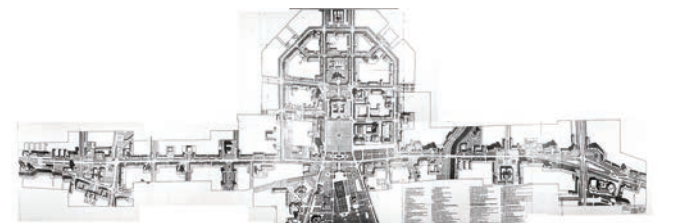
都市計画図も一部残っており[図78]、他の都市計画図や公共施設の設計図面も所蔵されていることが分かったので、鋭意調査を進



[図76] 2016年に移転し新設されたモンゴル国立公文書館



[図77] 社会主義時代の集合住宅の実施設計図(5階建・レンガ造+PC造)



[図78] 第1次都市マスタープラン(1953年)時の街路計画図

間取りのタイポロジー

間取りのタイポロジーについても少し分析しました[図79]。先ほど申し上げましたように、1970年代後半以降のPC造は、基本的にはほぼ複数の標準形からのチョイスです。住棟配置についてはいろいろなパターンがあって、並行配置、雁行配置、曲線状の他、ソビエト

連邦を表すCCCPのような文字のパターンもあり、大変興味深いです。住棟内の間取りについては、その職場の家族構成や年齢に対応し、パターンを選択しているのが見えてきているところです。PC造のグリッド構成のシステムの中で、プロジェクトごとに部屋割りをを行い、1人世帯タイプや2DKタイプ、3DKタイプを巧みに組み合わせて設計している様子が見えます[図80]。

私がむしろすごく興味を引かれるのは、1970年代以前のレンガ造のタイプです。初期のソビエト連邦の役人や、モンゴル人の中でも公務員や議員などのための住まいがレンガ造でつくられていて、非常に丁寧に設計され、一つ一つ設計図が作成されていたようです。当時の原図を見ると、設計者の意気込みとか、新たな首都建設への意気込みが伝わってきます。これらの図面調査によって全貌を早く明らかにして、皆さんに紹介していきたいなと思っています。

最後に、市場経済化した1990年代以降、民間のアパートが続々とつくられていますが、その間取りも少し気になっています。その理由は、私の研究室のモンゴル人留学生の親戚が不動産関係の仕事をしているので、設計した図面を一部見せてもらったところ、明らかにモンゴル人の感覚で、玄関を入るといきなり大きな部屋があり、その先に個室があるという間取りをしているので、やはりモンゴル人が計画するとモンゴルの間取りになっていくのだろうと思いました。社会主義時代の間取りの影響はあるのかどうかなど、まだこれから考えることがたくさんあります。

私が大学にいられるのは残り9年ですが、できる限りライフワークとして続け、近現代におけるモンゴルの定住の住まいについての研究をまとめたいと思っています。

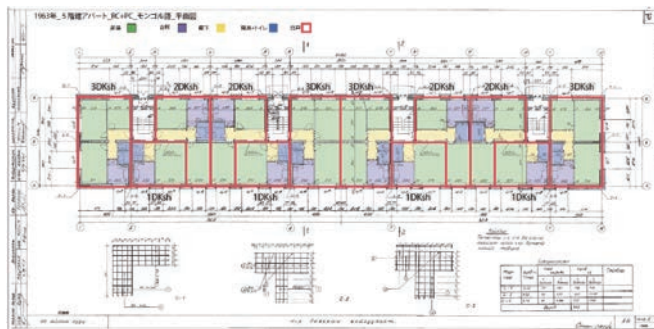
以上で発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

参考文献

- 1) 小長谷有紀:序章 木へのまなざし、モンゴルにおける木材利用と森林後退—19世紀末から20世紀前半の写真より、pp. 6~8, 遊文社, 2022. 3
- 2) 湊邦生:《邦訳》モンゴル土地関連法令集、『モンゴル研究 第20号』, モンゴル研究会, pp.124~137, 2002. 12
- 3) 富田敬大:ポスト社会主義モンゴル国における遊牧民と土地私有化政策—地方社会の土地利用に関する方法的考察, Core Ethics:コア・エシックス, 立命館大学大学院先端総合学術研究科, pp. 213-225, 2008
- 4) 佐藤憲行:清代ハルハ・モンゴルの年に関する研究—18世紀末から19世紀半ばのフレイを例に、pp.43~78, 学芸出版会, 2009.11
- 5) 滝澤克彦:モンゴルの大粛清と「死者の記憶」—記憶の集合性についての批判的考察、『多文化社会研究, 8』, 長崎大学多文化社会学部, pp. 143~157, 2022
- 6) 青木雅浩:「モンゴル人民共和国の首都建設事業から見たモンゴル抑留」、『東京外国語大学論集 (Area and Culture Studies) no.97』, 東京外国語大学, pp.1~19, 2018. 12
- 7) 小長谷有紀:モンゴル草原の生活世界, 朝日選書, pp.9~10, 1996.4
- 8) 齊卓彦等編著:内蒙古民居/中国民居建筑丛书, 中国建筑工业出版社, 2019.12

謝辞

本発表は科学研究費補助金JP20K04860「モンゴル国における住居改善の実践を伴う定住の住まいに関する研究」(代表:八尾 廣)ならびに、鳥取大学乾燥地研究センター共同研究02B2001「古写真を用いた環境問題研究」(代表:小長谷有紀)による研究成果の一部である。記して謝辞を表す。



[図79] 社会主義時代のアパート(レンガ+RC, PC造 5階建, 1964年) 平面図



[図80] 社会主義時代のアパート(PC造 5階建, 1965年) 平面図

DISCUSSION

重村 力(神奈川大学工学研究所客員研究員)

中井邦夫(神奈川大学建築学部建築学科教授)

柏原沙織(神奈川大学建築学部建築学科助教)

須崎文代(神奈川大学建築学部建築学科准教授)

石田敏明(神奈川大学工学研究所客員教授)

山家 ありがとうございます。非常に盛りだくさんな内容で、皆さんからもたくさん伺いたいことがあるだろうなと思いました。せっかくなので、皆さんからご質問などありましたら、よろしくお願ひ致します。

重村 そうしたら、私から4点申し上げます。

一つ目は、一番最後にソビエト連邦によるPC造アパートのプラン類型のことを話されていましたが、実は1960年代までは日本でも研究していたのです。ソ連建築研究会、略してソ建研という会があり、市浦健さんや早川和男さん、藤井正一郎さん、鈴木成文さん、他にももっとたくさんいましたが、そういう人たちがソ建研をやっていたのです。新宿にソ建研の人たちがよく飲みに行く居酒屋があって、そこで私は「伝統左翼は嫌いだけど、ソ建研のおじさまたちは面白いな」と思って付き合っていました。それで私は早川先生の研究室の助教になったのです。日本建築学会の図書館や東京大学の図書館には、多分そのソ建研の資料があるのではないかと思います。唐崎健一さんや日本住宅公団の方もたくさんソ建研に入っていたので、公団の図書室にもあるかもしれません。そこで私が昔見たような資料と似ているなと思いました。

もう一つは、1980年に私は大連やハルピンによく行って、大連には長期滞在していました。ご承知のように、ある時期の中国はとにかくソ連と仲が良かったわけです。ところが1950年代から仲が悪くなり、1960年代にはソ連人の技術者をみんな追放しました。それで、そういう技術者たちの立派な宿舎があって、私たちが大連に行くと、昔ソ連人が住んでいた家に住まわせてくれるのです。だから、今も多分あると思うのですが、大連にあったレンガ造やPC造の社会主義時代の建物は、モンゴルのものと似ているのではないかと思います。プランを見ていて、そう思いました。中国とモンゴルは地続きですから、特にハルピンのある黒龍江省は、隣が内モンゴル自治区です。内モンゴル自治区と、外モンゴルと呼ばれているモンゴル人民共和国は、文化人類学としては本質的に同じですから。

どこだったか忘れてしまいましたが、私は一度、中国の郊外にモンゴル人がゲルを建てたから見に行こうと行って、中国の先生方と見に行ったのです。そのとき、ゲルはあつという間に建てられたのですよね。2時間もあれば建て終えて、宴会が始まると言っていました。それな

らば、ゲル地区の敷地の中でも解体して、フェルトを虫干しするなりして、それで気持ちがいい場所に建て替えることも簡単にできるのではないかなと思ったのですが、その辺りが分からないところです。

それからもう一つ、今日のお話でお聞きしたいと思ったのは、柵で囲った四角い長方形の中にバイシンとゲルを建てるという屋敷配置です。それは不思議だなと思って聞いていたのですが。一方で、モンゴル人たちが何も柵がないような草原に野営地をつくるときに、モンゴル研究者の磯野富士子さんなど、昔から研究している人の資料を読むと、何か秩序が感じられないのです。柵も何もないし、円環状になるわけでもなく、碁盤状になるわけでもない。だから、一般的にゲルというのはどういう原則で配置されているのかが謎で、一度見に行きたいと思っているのですが、その辺りはどうですか。ゲル地区は、言ってみれば碁盤状秩序とゲルのマリアージュのような感じですよ。それがどこから来ているのかなと思いました。

全体的には大変興味深く聞いていました。ありがとうございました。

八尾 ありがとうございます。

定住生活でゲルを使わない理由は、一つは、近年ウランバートルは時々すごい大雨が降ります。そのときに、排水の仕組みもきちんとしていないので、道路が川のようになってしまうたり、ひどいときはゲル地区の中でも川沿いのところは水浸しになったりもします。やはりゲルにずっと住むのは、定住には条件が良くないのだと思います。

定住生活でゲルを解体して虫干しというのは、実際その場面に出会ったことがあります。生まれてからゲルでしか暮らしたことがない、元遊牧民のおじいさんとおばあさんが、ウランバートルにいる息子に呼ばれて隠居生活というか、息子の持っている敷地でもずっとゲルに住んでいる方がいて、何度か訪ねているのですが。ある日訪ねたら、ゲルがないのです。解体して虫干ししているから、その間どうしているかという、車庫代わりのプレハブの中で暮らしていて、ものすごく不機嫌そうでした。

遊牧生活においては、牧畜を放牧する、それから家畜の頭数をコントロールするための高度なテクニックがあって、結構忙しい生活サイクルの中でゲルの解体、組み立てをしているから成立しているのだから、おそらく定住生活にはマッチしないのだと思います。だからあくまで仮住まいのツールであって、ずっとそこに住むのはつらいのかなと思います。

配置の問題については、草原の中のゲルはやはり家畜と共にあって、梅棹忠夫さんが書いているのですが、人間がコントロールするというよりは、馬に寄り添って住まいを変えるのだとおっしゃっていて、まさにそういう感じですね。だから、人間の秩序ではないのだと思います。宿営地に何棟もゲルが集まったとしても、入り口の向きは南か南東向きにして、あとはお互いに陰にならないように配置するだけで

す。そうすると、東西に並ぶかたちを取りがちではありませんが。

山家 すみません、モンゴル初心者に教えていただきたいのですが、遊牧民の人たちは、世帯ごとに動いてるのですか。元々コミュニティのような移動の単位があるのですか。

八尾 ないです。宿営地でも世帯ごとです^{※9}。ゲル地区にやってきても、世帯ごとに独立して暮らしています。

※9 遊牧民の家族では子どもたちは大きくなったものから順に独立し、家畜を分け与えられて別の宿営地を構えるのが基本である⁷⁾。

山家 写真で見せていただいたハシャー、木柵は高さ2.5mでしたか。緑色に塗られているにしても、相当高いなと思ったのですが、あれは見えないようにしているのですか。なぜあれほど高いのだろうと疑問に思ったのですが。

八尾 はい。ウルガだった時代の僧侶の家は2.5m、現在のゲル地区では2.3mぐらいですが、高いです。中は見えません。理由はいまだに私にも全然分からないのです。

山家 もしかすると、一番最初につくられたのがひな型になって引き継がれているかもしれないとお話がありました。

八尾 それもヒアリングしています。「何で高いのですか」と聞くと、げげんな顔をされて、「当たり前だから」とおっしゃるのです。

重村 防犯という理由はないのですか。

八尾 防犯のためと言う人はいます。「一度テレビを盗まれたから、ちゃんと守りたい」とおっしゃった方はいますが、ほとんどの方は「みんなそうしているから」という答えです。

重村 遊牧に関してはいろいろな本を読んだことがあります。馬や自動車で宿営地に近づいたときに、主人が犬を制止するまでは地上へ出るな。そうでないと犬にかみつかれる、という文章を読んだことがあります。だから、遊牧民は犬を塙の代わりにしていたのかなと思います。

八尾 遊牧民の方と出会うと分かるのですが、外や家の概念が私たちとは大きく違うのを感じます。ゲルだけが家ではなく、屋外での生活時間も長いのです。ダルハンで出会った遊牧民は、夜間狼から家畜を守るために外にソファを出して薪をし、家族の一人が外で寝ると言っていました。おそらくそうした生活圏の外部も含めた空間が

家、つまり彼らにとってはゲルの周りの領域も家なのではないかと思っています。それが高い柵に結び付くのかどうかは、ちょっとまだ分からないですが。

中井 建築学部の中井と申します。今日はありがとうございました。非常に面白くて、何から聞いていいか分からないぐらい興味を持ちました。

基本的なことでも恐縮ですが、幾つかお聞きしたいのは、最初の方に、土地所有に関する法律で、ゲル地区の区画が国民1人当たり0.07ヘクタール無償で与えられるというお話がありましたよね。この数字には何か根拠があるのか、なぜ0.07ヘクタールなのか、疑問に思いました。

それから先ほどの、ハシャーの中にバイシンとゲルが同居した居住スタイルがすごく面白いなと思いました。今後も補助ツールとしてゲルは残っていくのではないかとお話しされていましたが、どのくらい長期的に生き残っていくのか、世代が変わって定住が定着すると消えていってしまうのかどうか、その辺りについて、もしお考えというか推測があればお聞きしたいなと思いました。

八尾 0.07ヘクタールの根拠は、今尋ねられて、私もはたとしましたが、現時点ではお答えできません。でも根拠があるはずなので、調べてみます。世界銀行やアジア開発銀行からの指導でつくられた法律なので、おそらく経済的な計算、つまりそろばんをはじいて出している気がします。当時の都市部の人口と、住民にどれくらいの面積の土地を与えたら売買するようになるのかとか、そうした経済的な根拠で出しているのではないかと思います。あとは、これは推測なのであまり答えになっていないかもしれませんが、社会主義時代につくられた整然としたゲル地区の写真をお見せしましたが、大体あの大きさが基準になっている可能性はあるかなと思います。すみません、今ははっきりとお答えできませんが。

それから、ゲルはずっと残っていくのではないかと私が思っているのは、ゲル地区とはちょっと違うのですが、地方都市のダルハンでかなり経済的に豊かな方の一戸建ての住まいに一度お邪魔したことがあって、その方がやはりゲルを2棟持っていました。「ゲルは何に使うの」と聞いたら、「夏は庭に出して子どもたちの寝室にするのよ」とおっしゃっていましたが、そのようなツールになります。夏、ゲルは裾をまくし上げると、ずっと空気が流れて本当に爽やかで良い寝室になるので、そういう実用的な、かつ伝統も感じながら住む部屋として、ずっと使われていくのだろうな、とそのとき想像しました。

とにかく便利です。先ほど重村先生もおっしゃったように、たった2時間で建てられて、夏は気持ち良くて、冬はストーブさえ焚けば、表面積が極めて小さいかたちをしているので、すぐに暖まります。モン

ゴルでの生活には非常に便利で、建設しやすく完成度の高い家だと思うので、ずっと使われていくのではないかと、なくなることはないと思っています。

柏原 私はベトナムのハノイを研究していて、ハノイにもソビエト時代に建てられたアパートがかなりあるのですが、私は商業地の方が研究対象なので、これらの建物は見ていませんでした。すごくぼろぼろの状態になっているアパートも結構あるようです。明日からまたハノイに行くのですが、そこの建て替えや建て直しをしようとしている研究チームの方に連れていってもらおう予定です。今見せていただいたモンゴルのアパートは、結構きれいに普通に使われているところが多いという印象でしたが、どうしようもなく建て直さなければならぬ状態になっているような、そういう問題は残っていないのでしょうか。

八尾 モンゴルは断熱だけが問題で、先ほど申し上げたように、シールの目地部分が劣化して、そこから冷気が入ってきます。ウランバートルでは自分の住戸のところだけ、外壁に発泡スチロールを貼ってモルタルを塗り塗装をして仕上げ、断熱を強化している家がよく見られます。それ以外の構造的な面などは、調査していてもそれほど問題を感じないです※10。

※10 不動産関係者から入手した資料から現在の地図上で取り壊されたアパート数を差し引くと、1934年から第1次都市計画が策定される1954年の間に建設されたアパートは33ブロック、第1次都市計画(1954-61年):144ブロック、第2次都市計画(1962-75年):272ブロック、第3次都市計画(1976-86年):301ブロック、第4次都市計画(1987年以降):254ブロック残っている(社会主義時代のアパートは標準型の棟を複数連結する形式であるが、ブロックは複数の棟が連結したまとまりを指す)。まだ数多くのアパートが現役で使われており、住民組合により維持管理がなされているのも大きな理由であろう。

柏原 住んでいらっしゃる方が結構、意識が高いところもあるのですか。

八尾 住民組合があって、管理人がいます。それぞれの住棟ごとに管理室があり、管理人が住民のごみ出しのマネジメントとか、外構の花の手入れをみんなでやるとか、そういったことをいろいろ仕切っています。だから、それなりに古びていますが、現役で使われている数多くの住棟は、それほどボロボロにはなっていません。

柏原 ハノイの方では、写真を見せてもらったところ、斜めになりかけてるところもあって、構造的にも問題がありそうなところがありました。

八尾 ハノイにはそうした問題があるのですね。モンゴルは大丈夫そうです。そういう斜めになっているものはないです。おそらく地盤とか、地震がほとんどないこととか、そういうことも影響していると思うのですが。モンゴルの場合は凍土層があります。凍土層の処理

をしないと、それが溶けたときに建物が傾く可能性があるのですが、多分その辺りの技術は社会主義時代にはしっかりしていたのではないかと思います。ウランバートル全体を見る限り、傾いた住棟はほぼ見られないので。

柏原さん、ポスト社会主義国のアパート自体大変興味深いので、機会あればベトナムの情報も教えてください。

須崎 現代建築史、住宅史を専門にしている建築学部の須崎と申します。本日のご発表をとっても興味深く拝聴しました。ありがとうございました。

二つ質問してもよろしいでしょうか。実は私の知人が内モンゴルの出身で、お子さんはハーフです。その方は、元々の住まいがゲルで、遊牧生活をされて育ち、大きくなってから家族ごと都市に移住して定住されたというのを以前から聞いていました。そのため本日のお話も「こういう家庭だったんだな」と、現実的にとても面白く伺っていました。その方は、小さい頃は本当に日常生活のなかに馬がいて、小学校のときも毎朝馬に乗って、子ども同士で競馬をして小学校まで行くとか、ゲルを組み立てるときのお話などを聞いていたのですが、定住する際に馬を手放して、そのお金で子どもたちにお小遣いをあげたり、車を買ったりしたということでした。ゲルから定住型の住まいになった際のピフォーアフターで、何か手放された生活様式と、新しく得られたものが他にもありそうだと思います。何か分かっていることがあれば伺いたいと思いました。

あともう一つは、定住型の平面プランです。大雑把な感想で恐縮ですが、北海道やアイヌのチセ※11の平面プランと近い傾向があるかと思いました。風除室や前室があって、広間のような空間の奥に神棚があってというプランです。おそらく時代をさかのぼっていくと同じようなルーツがあるのかもしれないと思ったのですが、今日お話しいただいた形態の場合はどれぐらいの地域的な広がりがあるのか、もしお分かりでしたら教えていただきたいと思います。

※11 アイヌ民族の伝統的な住居建築。掘立柱を直に地面に立て、壁や屋根には樹皮や茅葺が用いられた簡素な木造建築。上座にはカムイ(神)が入り出す「神の窓」が設けられ、反対側に前室となる玄関や物置が配された。

八尾 ありがとうございます。遊牧の生活と定住の生活は、まるで違いますよね。

須崎 例えば家畜を手放したから、敷地内の構成が変わったとか、何か影響がありそうだなと思いました。いかがでしょうか。

八尾 家畜を手放したからという物々交換的な感覚もありますが、ゲル地区の方に、なぜゲル地区に住むのかという話を聞いたときに、もちろんアパートは面積が狭い割に値段は高いので、住めないとい

う方もいるわけですが、積極的にゲル地区に住んでいる方に、大気汚染などの問題もあるのに、どうしてと聞いたところ、多くの回答はやはり大地に近い暮らしでした。ある住民に教えてもらったのですが、モンゴルの方々にとっては、地面そのものが自然なので。われわれ日本人は、自然というと山や木々を思い起こしますが、広がる大地が自然であるという観念からすると、やはり大地に接して住みたいというところがあるのかなと思います。だからアパートに住む人は、大地と近いところに住むということを捨てているわけですね。

ただ実際の生活面では、アパートの方がはるかに便利で、暖房インフラに接続しているのが一番大きいです。公共料金を払っていると思いますが、暖房インフラに接続しているから燃料を買う必要もありません。ゲル地区の生活の場合は、年間に4tトラック一杯分の燃料や石炭を買って、トイレも含め、自分で火を起さなければいけないわけです。インフラが整備されていないのは非常に大きいですね。

平面プランの類型に関していうと、まだ私はウランバートルしか調査をしていなくて、今後、地方都市まで調査対象を広げたいという考えもありますが、地域によって微妙な違いはあると思いますけど、おそらく同じではないかと想像しています。冬の気候を考えると、玄関一キッチン一大きな部屋が軸になるところは変わらないのではないかなと思います。ただ、西側の方のカザフ系の住まいだと、微妙に変わるかもしれません。あと、内モンゴルは全然違います。内モンゴルは基本的に中国化が進み、農耕を営むようになった住民の多くは四合院形式の家に住んでいるようです⁹⁾。

須崎 ありがとうございます。私は台所やトイレの歴史を研究しているので、ぜひ一緒に行って拝見したいなと思いました。

石田 石田と申します。ご無沙汰しています。

お聞きしたいのは、モンゴル自体が非常に若い年齢層の国民が多いということで、政府としては、ウランバートルなどでは持ち家政策のようなかたちで推進しているのでしょうか。例えば持ち家の場合、年収のどれくらいで購入できるのでしょうか。それからゲルは年収のどれくらいの金額で買えるのか、その辺りをお聞きしたいです。

八尾 まず政策的には、完全に持ち家政策ではないです。都市計画上は、アパートしか計画していないです。マスタープランには、日本のような低層住宅地は、全く計画に入っていないです。

石田 そうすると、最近民間でも住宅供給が増えているという話ですが、これもやはり賃貸アパートですか。

八尾 アパートは、賃貸も徐々に増えてはいるようですが、多くは分

譲です。

石田 購入する場合、年収に対してどれくらいの割合ですか。

八尾 今はちゃんと数字を持っていないので、正確にお答えできません。でも基本的に、中所得層以上の30歳代で結婚された方は、家を購入するのは当たり前だと思います。独身の方の場合、賃貸に住んでいる人もいますが、家族を持ったら基本的にアパートは買うものという感じです。アパートにも、すごく高額なもの、比較的庶民的な値段のものと、さまざまなバリエーションがあります。あと、社会主義時代のアパートも比較的安く購入できるので、購入するのがベースだと思います。

ゲル地区は、政府のマスタープランでは、基本的にはできるだけ縮小していくべきものという位置付けです。つまり、ゲル地区も一部は中高層化して、アパートに建て替えていって、人口を収容したいというのがマスタープランの考え方です。

ただ、私自身の考えでは、ゲル地区は住民の自力で住む力も大きいので、フォーマルな都市計画に組み込まれることなく、ずっと存続していくのではないかなと思っています。もちろんインフラは徐々に整備されていくかもしれませんが、ただ、固定資産税の仕組みがきちんとしていないが故に、インフラ整備ができないのです。根源には税制が問題としてあります。だから、住民の自力で住む力に任せて、徐々に整理はしていくけれど、ずっと残っていくと思います。

山家 長い時間、ありがとうございました。そもそもモンゴルという国が非常に興味深い上に、資料や実際のフィールドでも調査をされて、とても奥行き深く、いろいろなお話が伺えたと思います。八尾先生、ありがとうございました。